

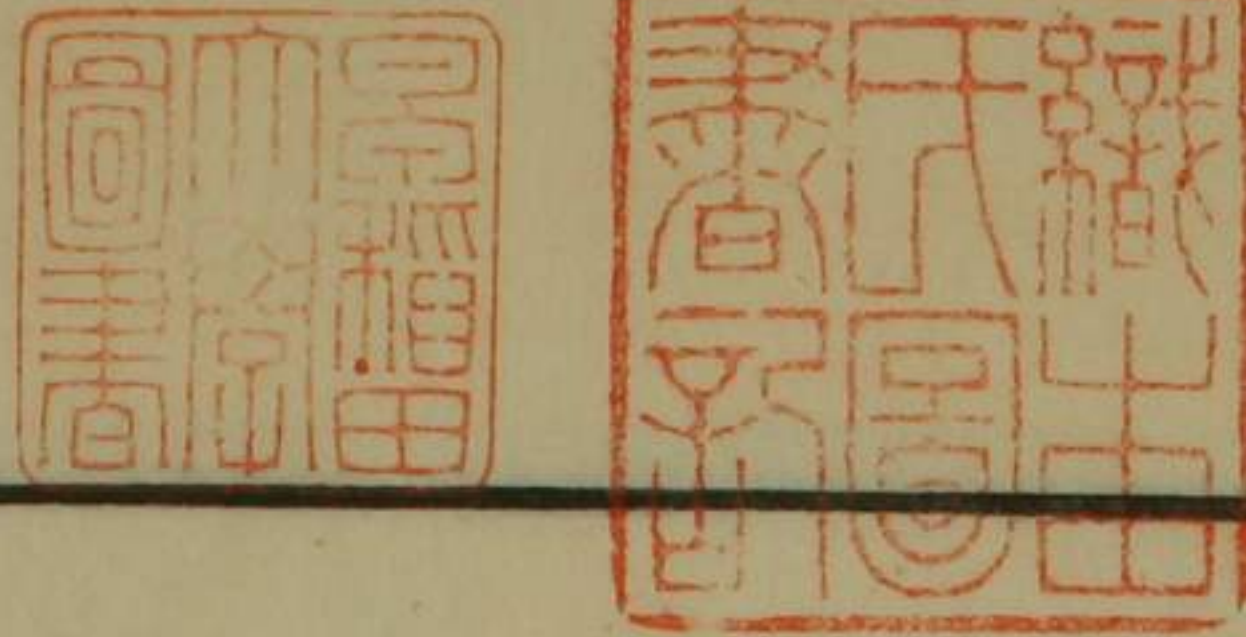


紀伊國名所圖會

後編
 四之卷
 在田郡
 海部郡

ル 4
 325
 21





紀伊名所圖會後編卷之四

目錄

- 湯淺莊
- 御茶屋跡
- 團主神社
- 明惠真蹟
- 舟原傳子圖
- 湯淺驛
- 湯淺氏故居
- 湯淺醬油
- 白檀在庭射像
- 本勝寺
- 満願寺
- 吉川村
- 田村
- 田坂
- 託宣古圖
- 方寸符子圖
- 月見石
- 湯淺系圖
- 玉井橋
- 福藏寺
- 寶林寺
- 徭樂寺
- 逆川
- 枇杷
- 白上降
- 白神磯
- 頭圍神社
- 漫師
- 諏訪神社
- 仙光寺
- 入江松原
- 白方病所
- 逆川王子
- 森崇基故居
- 絶無畏寺
- 毛無島
- 駟馬圖
- 石侍
- 湯淺郎故居
- 深寺寺
- 真楽寺
- 本糸石
- 久米河王子

湯淺城湊

廣川

天國劍

天神社

鷹嶋

井関驛

馬留王子

先賢八幡宮

鹿瀬山

海部郡

蓬萊

戸津井

大引浦

靈巖寺

廣橋

八幡宮

立神

廣城趾

井関川

津木坂

岩淵社

井関山

衣奈莊

衣奈八幡社

小引浦

由良莊

穴地藏

養源寺

男山陶器

かへ岬

能仁寺

幸山八幡宮

上草籠

觀音堂

鹿背城湊

由良坂

縁起一巻

白埼

興國寺

廣莊

帛印判

法藏寺

貝化石

井関王子

河瀬王子

藤籠

鹿瀬名司

法華壇

鷺林寺

黒嶋

海瀬鳥

東泉寺

櫻嶋

宇佐八幡宮

修善尼寺

妙見宮

柏村

由良湊

莊天神社

長谷寺

沙撈明神

河戸浦

白山權現

津敷跡

小松

富嶋

湯淺莊

七ヶ村を治ふ中吉川
湯浅の二村を治ふ

吉川村

東條山北の麓にありて村中を治ふ
吉川中流にありて吉川中流にあり

地無畏寺藏

余を治ふ

西平丸ねん甲十二ヶ村を治ふ

逆川

源の湯浅村界にありて吉川内流二村を治ふ
西平丸ねん甲十二ヶ村を治ふ

夫木抄

逆川源の湯浅村界にありて吉川内流二村を治ふ

源淳國

逆川王子社

吉川村北の一村の神あり

御幸記

又凌嶮昇イトが山下山之後

逆川王子之此名云云

源淳國

○御筆巻紙 日村これ細中よりと懸聖御書

田村 吉川村より山を備て西の海邊より北の山を以て

産物批把 日村の谷に小を指して交ててとて味抱てし一率府をよめ

森九郎景基故居 日村より西の海邊に九男小判して田村極楽寺を以て

つりゆ川を流るる御書

國主神社 日村より西の海邊に

國津神

嘗社古くより久授呂れ宮といひ傳ふ久授ら國極少て呂

肥後あはれを寛文紀小上古吉野れ小極人來りて此地小

紀るとつり 又社傳小天曆一年大和國三輪臣の才河於播司といひ小三輪

浦邊より紀日己月小播司子田浦小來り登臺しとる香の中子頼佐

社地より南入町許小小濱といふ浦より

愈其後の叢崖小法坐りてと文永七年湯淺氏の裔

森柔比地小遷りてとつり 新に撰承

田坂 又田村坂といふ田村より極東

白上峰 田坂より東極東田村の界小ありて山三峰ありて白上中白上西白上といふ

東白上率都婆銘

金剛藏菩薩 建久之頃蟄居修鍊之間

西白上率都婆銘

文珠師利菩薩 建久之頃草庵之處

建久六年秋荒中の交を釋しとる尾山を出て聖教と負

ひ佛像を荷ひて紀別小下向志て湯淺の極東村白上峰小

一字草庵を撰て心住其山の白峰密叢業

て磐石邊時と東西を長く志て二丁許南小を撰て

坂峰より峻嶺の叢上又二間の孤庵を立川前西海小對し

河波依傳をらむと雲濤漸起とて眼海霧鎖し南の幽谷と

一本明惠傳云

施無畏寺

重陽衝雨遊施無畏寺
四顧塵煙斷鳥啼
白日閑只聞清梵
響寺在老杉間
石齋青苔秀崖傾
野菊香滿城風雨
日古寺過重陽
上街邦彦



南く其塚横小建とて東々白上此等其尾跡下りて
深谷小色以小教谷とて小谷何と漢嵐者小記して雲と
巖以小記して其尾跡此前而小此角小一棟此去り其下に
覆床一物とて之より庵の傍小白巖界清くして其谷教
せり窟窟此勢己小條の傍小記して云云

絶無畏寺

白上山下極系村以くりて云云
宗在茲於別梅尾言ふ小記

南紀風雅集

施無畏寺

北園仲温

明公卓錫 白神岑法界風烟接海 淨香象護真孤洞水
金猊留偈積巖陰攢松晝暗清聲合倚竹曉寒林霽深
借問誰能參妙理山僧共語出塵心

自註云明惠上人始建寺我鄉白神山寺
記稱上人夢異文殊大士語將別攬猊尾

當寺ハ明惠上人練ゆせし白上山此林禁小て當社東北郎
景基此地を下志て一堂を建立し上人を居結して伏
此梳篋を菓原浦小庵へ永く便攝教生此業を禁斷し
て伏表れ布施小擧げ生類此畏を無きと絶して云云

寺と絶無畏寺と号せり上人此滅後小弟子信彼
執像を安置し一室を寄附せし八所遺蹟記小んんんん
一義林房小田一室を寄附せし八所遺蹟記小んんんん
今於境内山林涂地小志て奉堂冥山涉執堂寶藏法
守其日社建むらへ田面楓樹多し又奉堂此海小上人
手植せし那木板松等此古本何とて小天保十四年九
月十一日東刺山崩して其古本等傷れし奉坊を堂
舎此下小何とて而南此海小面し毛無前藤の鳩を
手あもとてく齋治思鳩をやく絶してとも小此等場
此法系を加へ浪の響松此多ると上人の心をまを
當知れおかげ小此海小目小んんんんん懐意の情
を起せり又藤系景基が寄附状小於中一門四十九頁
草名を書連して上人加書せられ文書及遺物乃寶銀

深依七中隨表大紙
頌考考考考考考考
考考考考考考考考考
考考考考考考考考考
考考考考考考考考考
考考考考考考考考考

巳四編四六

湯清法果原村施無畏寺

法門高界

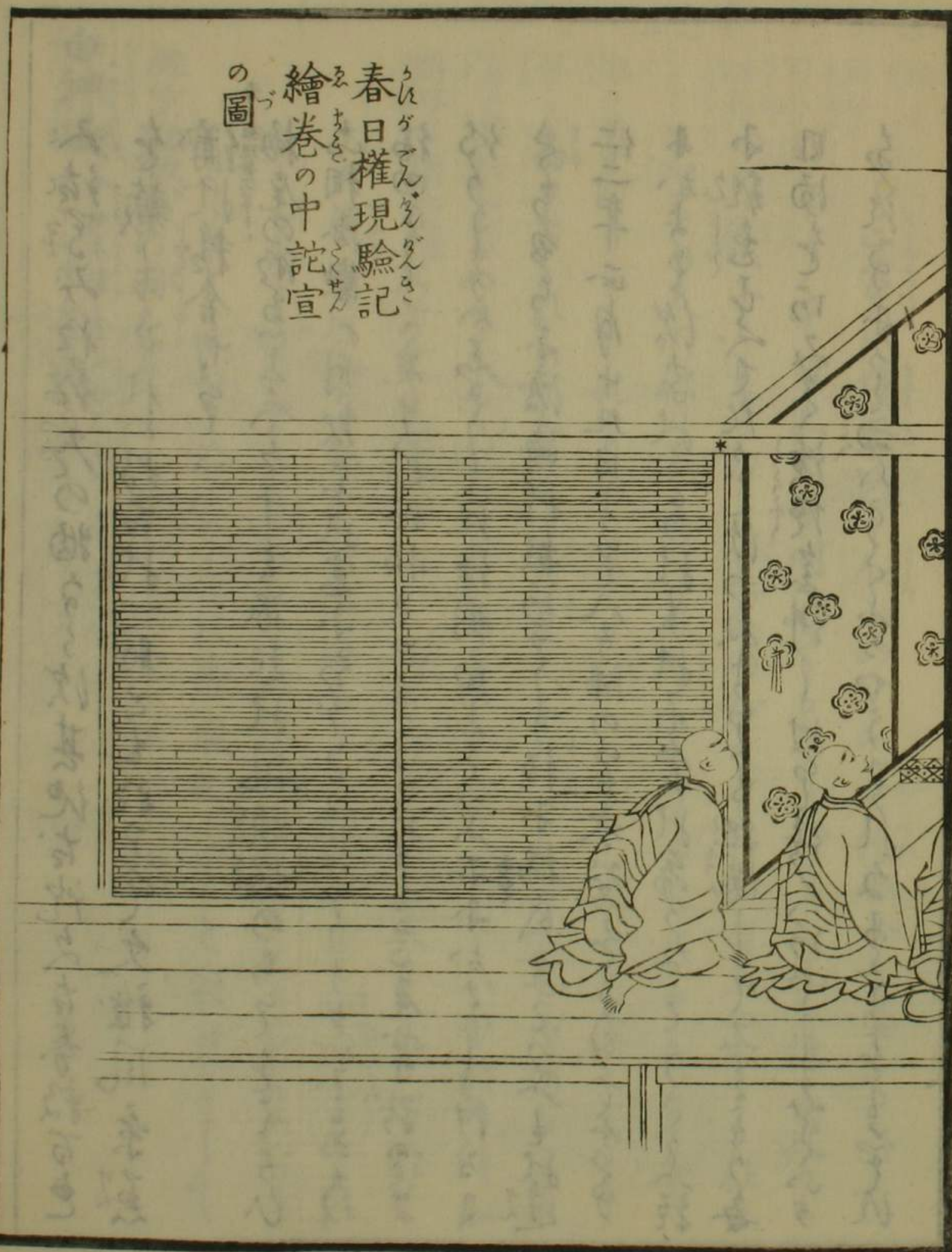


四至

山
限東

明惠上人真蹟臨寫

春日権現験記
繪卷の中託宣
の圖



春日権現験記第十七

入法字みねの物々々次其地古陀文古券扱百色
を藏しし好吉此一物ともねりて文雅風景意
備此精舎なり

梅尾の明恵上人と十玄孫起此風煩惱のちををくらひ
六相急難此月観念此意不わがらつたりてくばふ家乃
福回とて元生れ依怙とてきそれとて尾宰勢のす
ゆりしと志をて紀伊國白上とてふふかきしけるこ
とら自ら小湊海北頼りて一程小楠氏女といふも此達
仁二年正月十九日よと八ヶ日の留水碁をくらつて全の
母かよと次家北とられも此不食れ病うなとてくは頼
小頼色とてたかた次つねよとて肥満してみえり毎
日湯をらみく漬煙を沸しけり法人のやしみくつ
あれるすふくと回びとてみるやうにれなぬことをも

肥田編四八

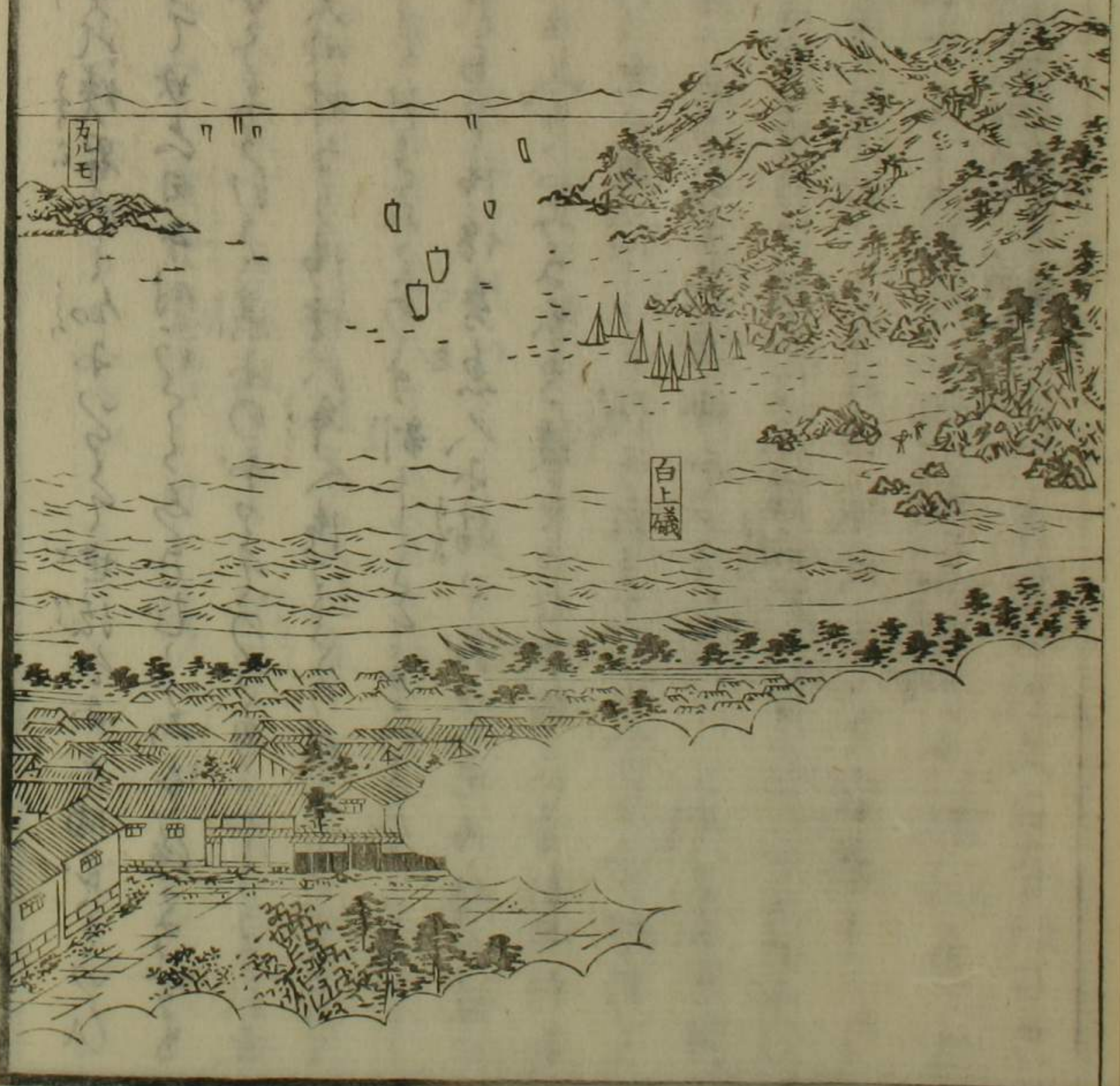
二寢れ境界のいふつとて世法公ふそゆとといひ
けりて女と日午時とて志をむしを漂子れも
わのうへふらうけり其小のがりてのうもやうとれを
是真田大町村より湯坊れとて流りてけりきとめく
まげりしとゆきとこのり制しとてやうんかとあり
希とてれあり湯坊者恵人小頼とれゆ也湯坊を伝
とてあつる人をびみる家も復もるらり時ハ南都の伝
へもきたらとせとあべと伝らねと上人うとけねく
六の傳をうりゆきと後海をとていしと申さるそれ
時うやうとをりさせたまふ懐妊の人をれとをりのや
いさうとさるりねしと此湯殿候もとを寂然とて

白神磯

今和歌浦といふ白上山の山折海小八
のすし飯もよくなり

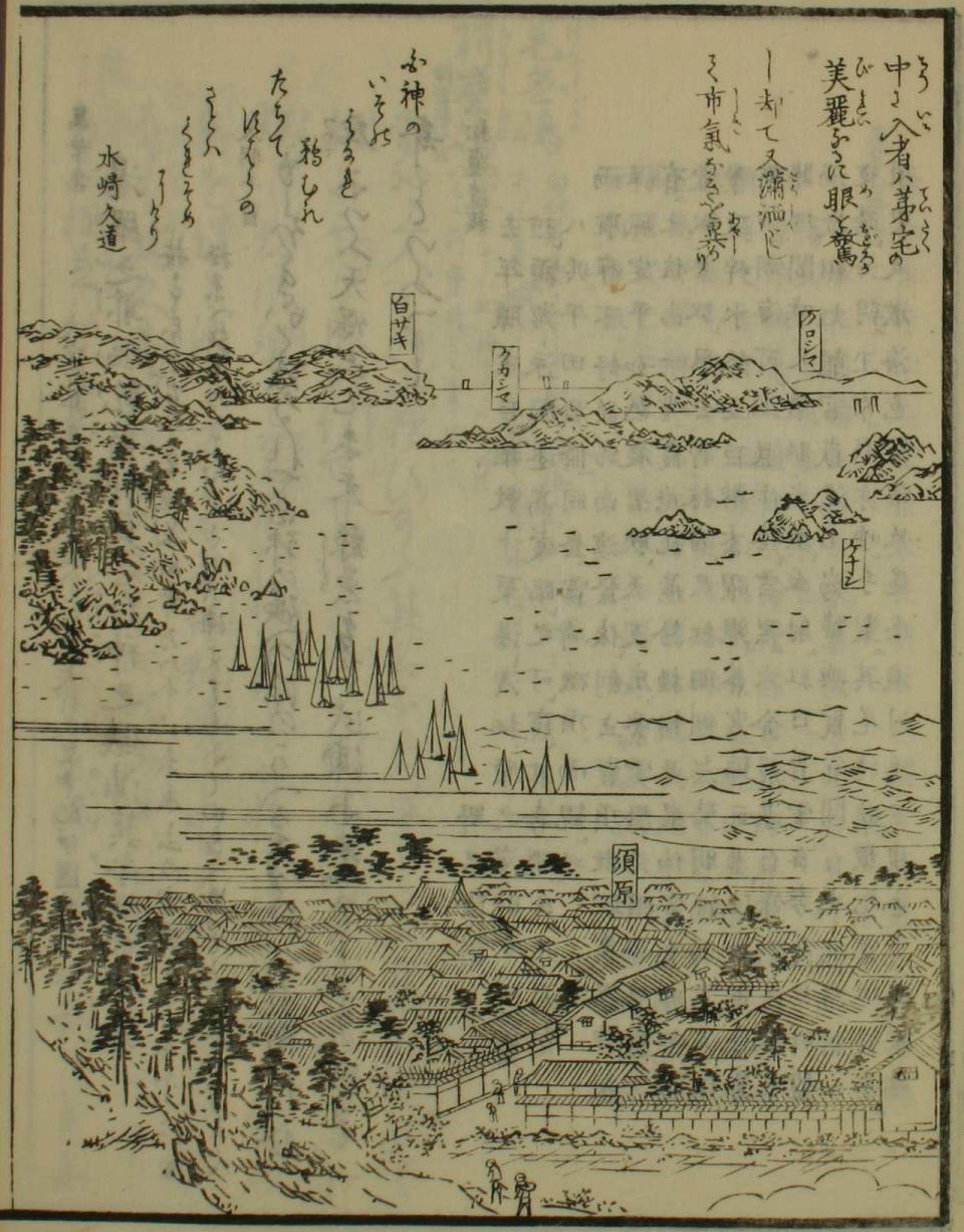
白神磯
眺望の圖

須原を國內豪
富の叢淵にして
皆これ陶朱倚
頭の徒を以て
こそ死謂江戸
相持を以て賣
買貨殖の産業
彼地ふて營々
故ふ一なる此邑



中へ入者茅宅
美麗なる眼と驚
一却て又瀟灑
く市氣かると異り

水崎入道
お神の
いそよ
つらき
たらて
ひんげ
くま



湯羅之耶塩乾雨邪良志白神之儀浦箕乎敢而榜動

按此系小古年宴屋家御幸乃今此系麻山の宮道より西ふての
揚系へ載るる乃よりして浦より舟にて由良へ渡りて多ふりらん
文明十首

右衛門督

序小つ天條とて来年鯨魚多くは浦小来りしりりり

新とつて

松廬遺稿

去年臘末巨鱗數十聚湯淺柘原之海時々浮鼻
竝額游泳驅逐高處臨之可窺其躍之
八共平田君脩同登霧崎磯而觀之
兩腕痒不舒欲釣南溟鰲立巖頂微睨萬里清春
洋風定平如砥凝碧狀天反成紫雲際曠杳無窮只
有土依山一嘴霞光飛紛糊此裏仙窟有耶無寒
裳飄然風去折採百尺珊瑚忽驚明鏡面生遊散
黎破碎怒立巨鯨奮躍六合飛瀑白條倒逆雷急
然噴潮可謂眼暴雨捲雲黑紅日青電爭奔發星
開坤闔又喻眼光灑血射與鬣聞白也捉月明一
渦掀翻虹龍宮嶽沒山崩射與鬣聞白也捉月明一
夜跨汝朝王京我亦唾手製其尾將欲攀九宵挽
須臾波激海色綠暗帆遙瀛州鵠下視垂天鵬翼端

益知方寸宇宙寬振衣長嘯日已落天風颯々蒼髮寒

乙未正月鯨魚數十來集柘原之海予作鯨魚來

鯨魚來柘原之海予作鯨魚來
傷其非可來也
橫海之志何所施撼山長鬣徒磊砢山人傷之為裁詩
鯨兮鯨兮慎勿陷禍機世路崎嶇不可近淳朴古風今
皆連吁嗟鱗介之族何荼毒短鋌長鏑尾汝窺獨有南
溟堪窟宅一帶兼山翠如圍好潛此間莫輕出待我騎
汝朝紫微

毛無鴈

白林の成りて十二町海岸上小なり

當此上人の傳小抄ひま其名を阿摩とつて月小傳ひて

船小なり風小にして清く澄る極日光を滄海の浪小
輝し松風響を岩崖に指小傳ふ世情の淺く泊客抱鏡の
真を傳ふ次とつとも縁對境し其心を細めざる
る一建久末此頃紀別小下向次湯淺の海中小二傳りり
南小相益ひて其る三丁丁もかりは鴈々東海長く南小

荊磨島
 岩穴東西へ
 貫るるるる



詩聖集
 川藻島前潮欲廻
 洞門波濺響喧廻
 送將赤々炎臆去
 迎得娟々素月来
 詩佛老人

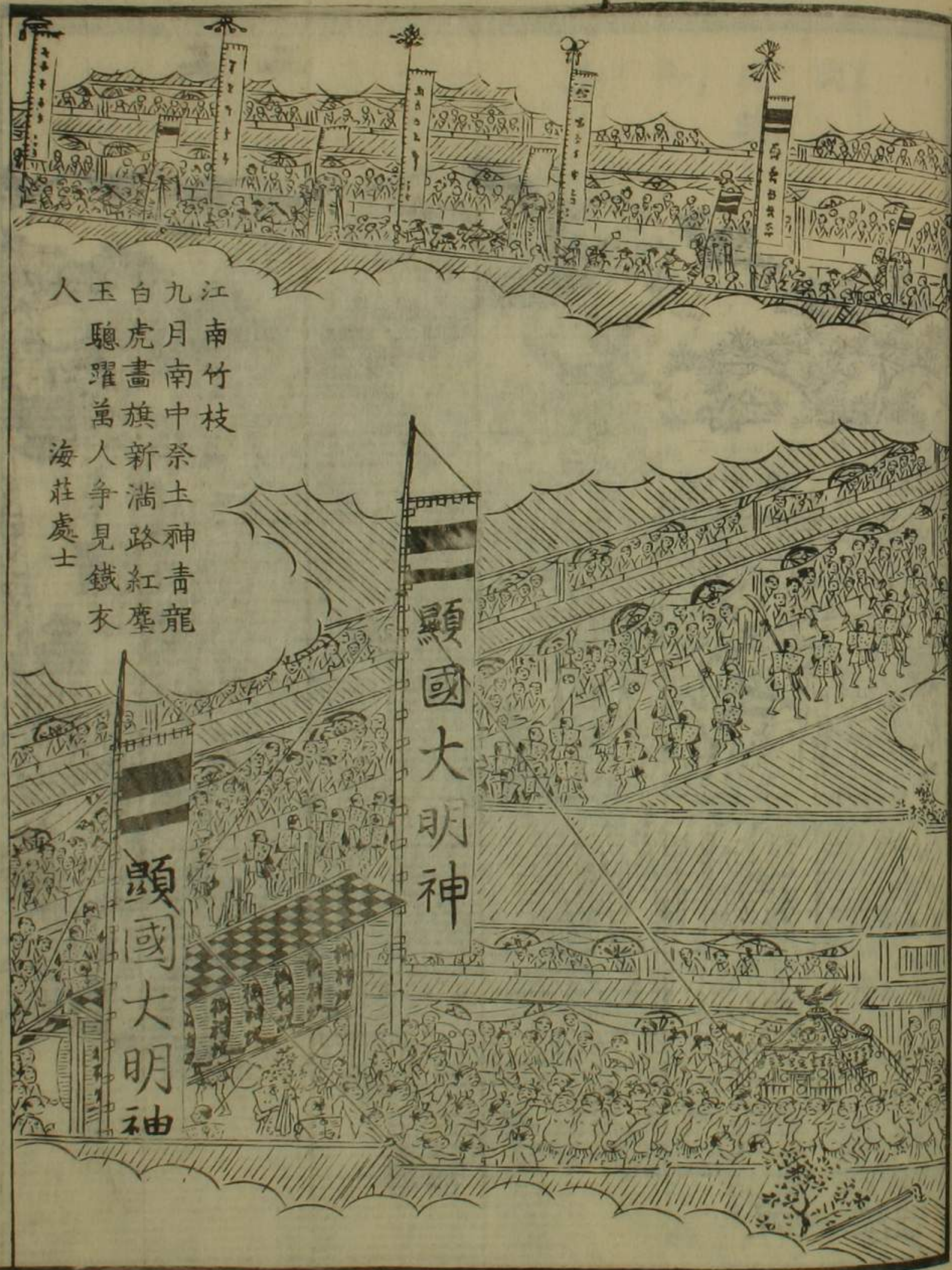




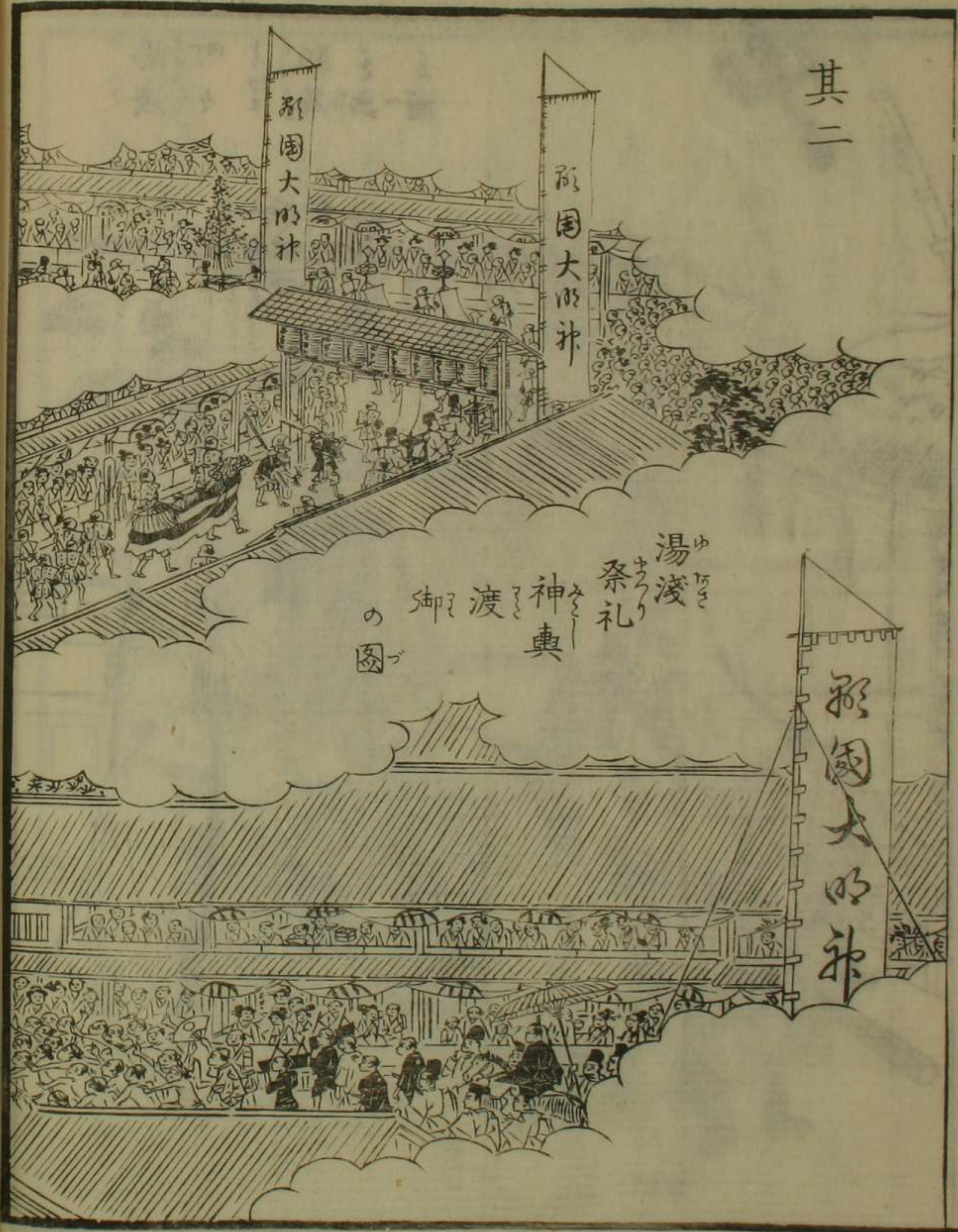
湯浅町々
馬を出づ
國



經一陸地より一里許を過て海中に待て又南二十丁
 許を去りて海邊久遠なる所に角小曲りて
 巴國に宿をふる西の方と海岬大虚と連りて西天の境満
 ろりしが意慕の心を色むる小使あり上人と道忠僧都
 并小喜海と二人相共小川の橋小渡りおれる船とゆいて
 六日後来る人より約東次南所廣海の南端の島
 面の洞小終小救救の板を以て懸て橋小築庵小擬して西
 日向いて釋迦像一鋪を懸けたるかの御前小於て續經
 念誦六日此の食するの胸一貝水一桶祀一箇なり
 ○方寸許 吉門村より湯浅村小知る友及小なり板乃廿一丁里老の傳小此板乃
 古名を御を板といひて懸れともがむも及も次おがつる
 又云古は山の本此葉を懸るを意慕るとい湯浅村守
 宗重よりけしん石塚一板を木村より移れといふ
 湯浅村の長田中より老中巴國村の
 湯浅神社を祀りたり九月十八日馬馳り
 當社といつれせ小田村小坐次國津神を勧請せし小寛文



江南竹枝
 九月南中祭土神青龍
 白虎畫旗新滿路紅塵
 玉聰躍萬人爭見鐵衣
 人海莊處士

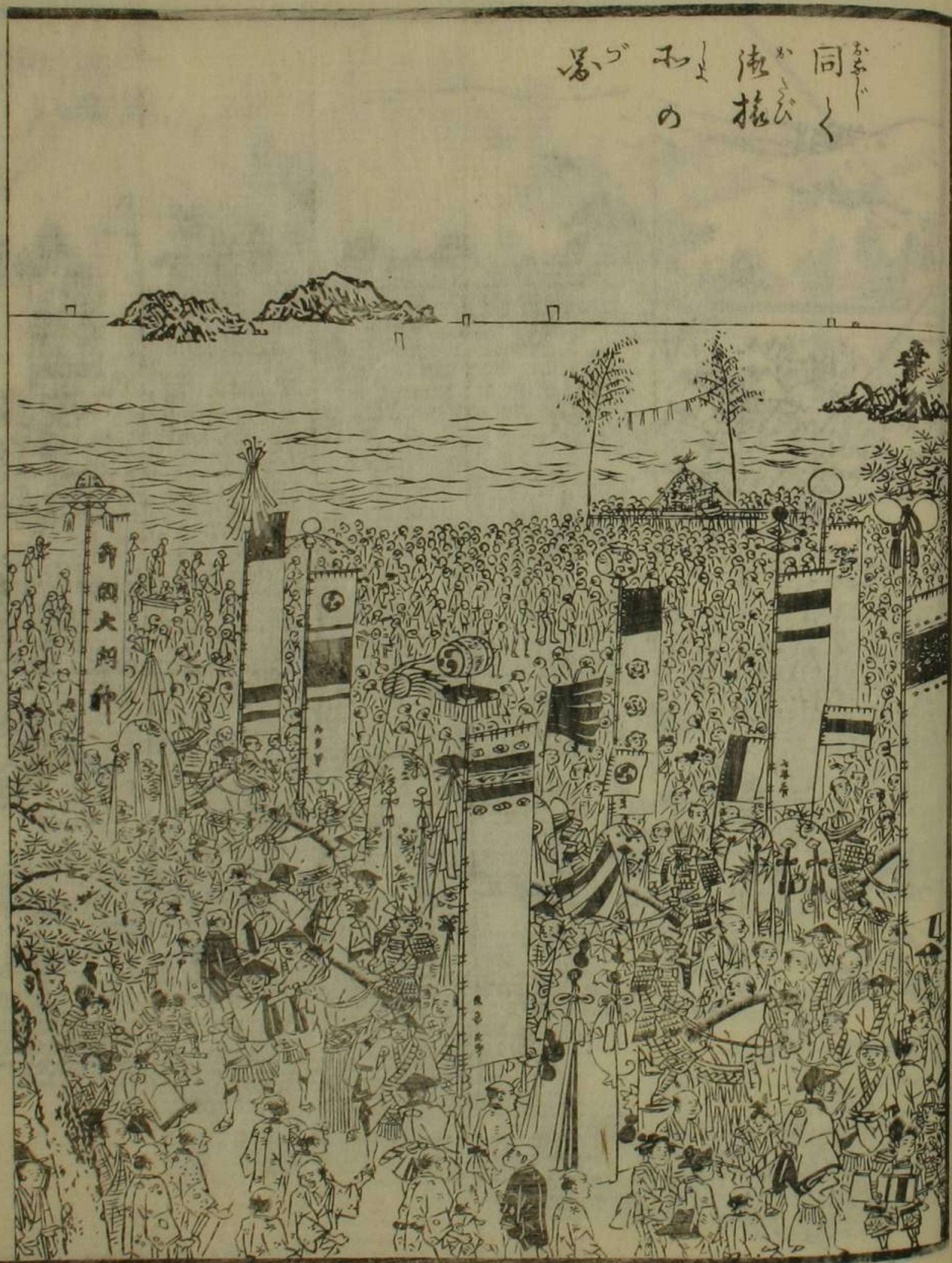


其二

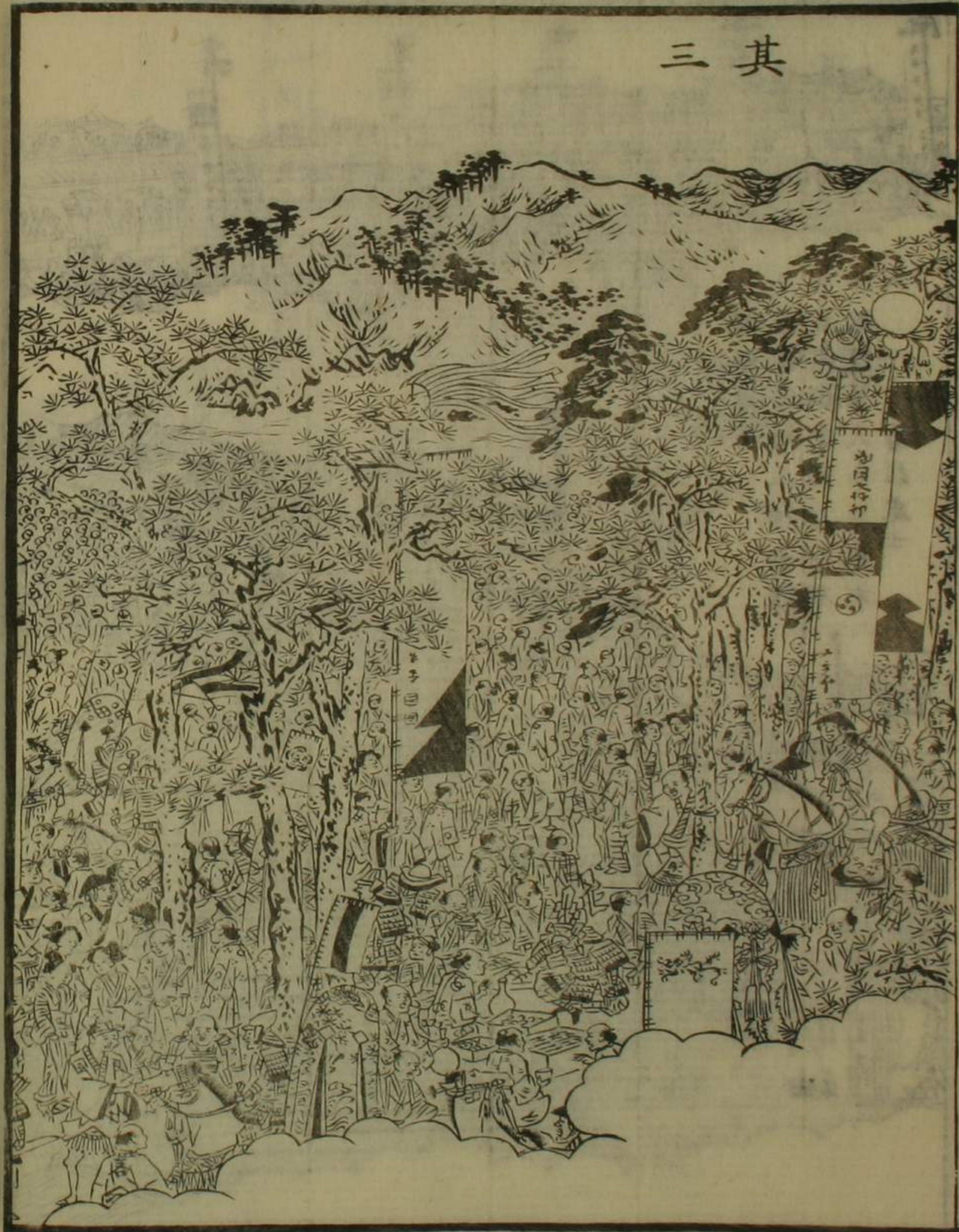
湯淺祭礼
 神輿
 御渡
 の園

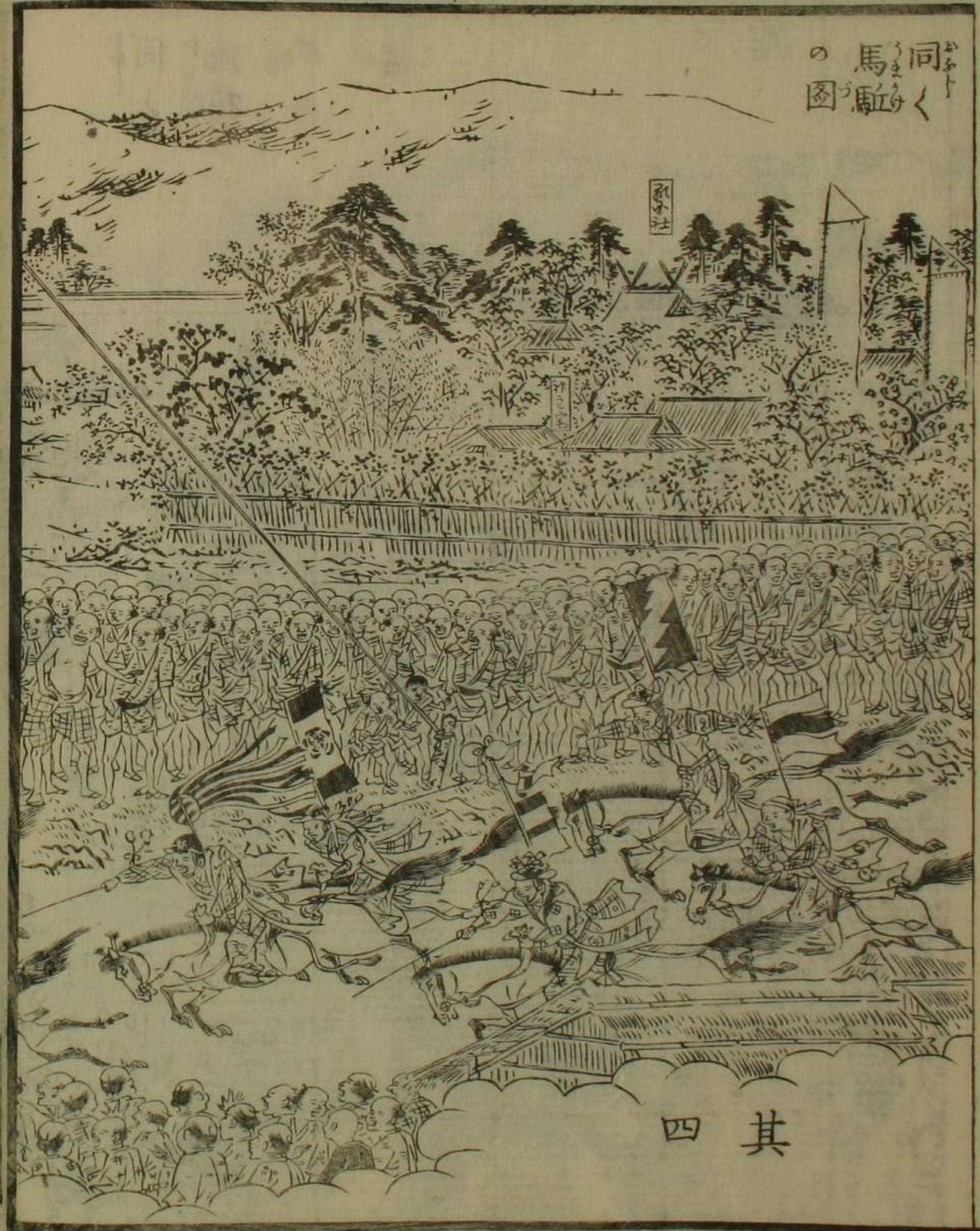
顯國大明神

同様の
法が
おの
の
ま
ま
の
ま
ま



三其





年中 官命ふよるとて顯國神と稱号し李梅溪とて
て多居れ顔をか勢と多り志うりしよりこれと社
教を退ひく後これと井ととを

湯浅驛 文系驛より一里左乃小町の町を乃
町内より其化市街の名今略し

湯浅の驛々其野法の咽喉子居て市鄧旅舎軒と連ね往
来常小徳澤とて海邊と遠近の高拍風小後へ出入蟹戸
れ溪艇と船多々停つらとて更つら小野軒つらとて実小海陸福楼
の地とつらと古湯浅氏此地小居し頃甲冑つら此良之り
て其名四方つらとてつらとて古書小見えとてよりつら
れ村落中をのりつらとてんや天正年中海邊小石垣を築つら
入りの松系を并つらとてより以来高賣市街とてよりつら
にかよび寛永十三年更つら小石とて多みく海小築出つら
地と実つらとてより戸教とて小倍つらとて遂つら小郡中つられ於會

とらるれとてつら建保建仁の頃和歌の御會つらとてつら宮
元文元年小涅槃會を修せし宗景入道が石倚のつら
と市街乃つら小埋没つらとて今これをつらとて

明月記

寛喜二年正月十六日己酉今日人々物語云少將頼氏朝臣
参熊野於湯和左宿与其侍後見左衛門尉合枕卧之間燈消
眠覺忽聞奇音驚起秉燭見之件男顔加手被斬唱念佛二聲
即死少將雖悲歎猶遂参詣云甚不可然事歎昨今已下向云
聞事躰只共人之中所為歎

月見石

湯浅派治を町東側の人家の裏小り建保四年八月 及び祠上皇慈覺寺
の附近地の海邊小出沖あり石小海邊をうけさせ多ひ月を焚くといふと
或人いふ又小町の素小井より作幸の
附けを信せし中つらとて

建保四年八月廿日五首御熊野詣
後鳥羽院御集 路次當坐和歌湯浅宿

勢つら神のみつられ山極つらとて風のつら向とて
かつら山の村のつらとて火つらとてまつらの夕月つら

あや秋のくさ里下先泳むんきき時よらいつれ月うま
をさつせや峰の本枯よもはくう吹はもそれ書れ山の端
ひふらうく旅のし神もぬをわー山のふれ書風のくさ

明日香井集

建保四年八月廿日

湯浅

湯浅氏の一口渡り一坂より始まる

鎧中 鑾形 劔首 竹角 等一向違古躰宗當世 棟君 寄紀伊國湯淺乃至
洛陽邊聞候物具細工共 自核調至為立隨分認手 碎心所結構也
湯淺莊司進 出テ申ケルハ 畧威毛コソ好モ候ハ子共我等ガ

紀四編四十八

石崎

石崎 古人名を湯崎の古名といふは強あく湯浅中れ字なれ

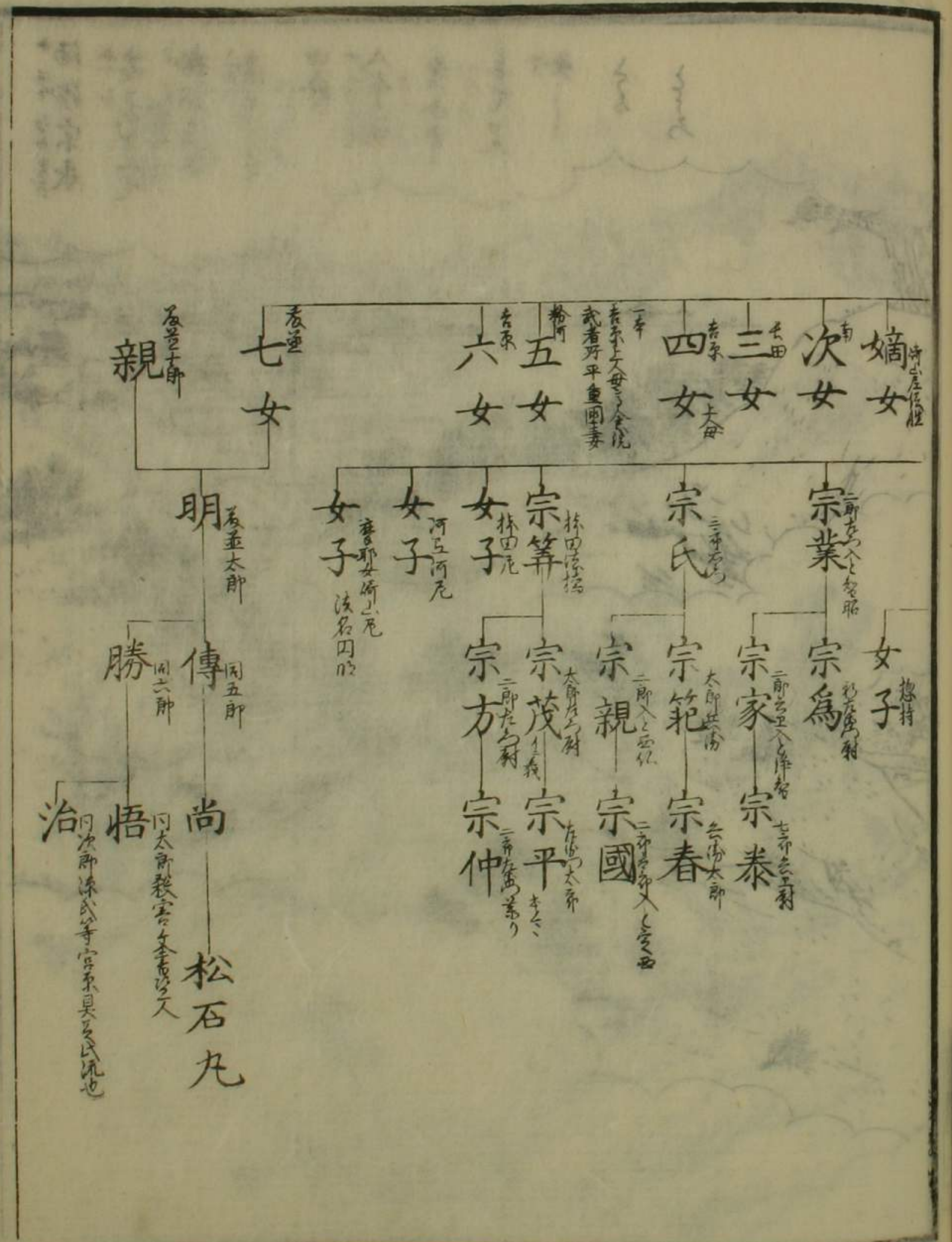
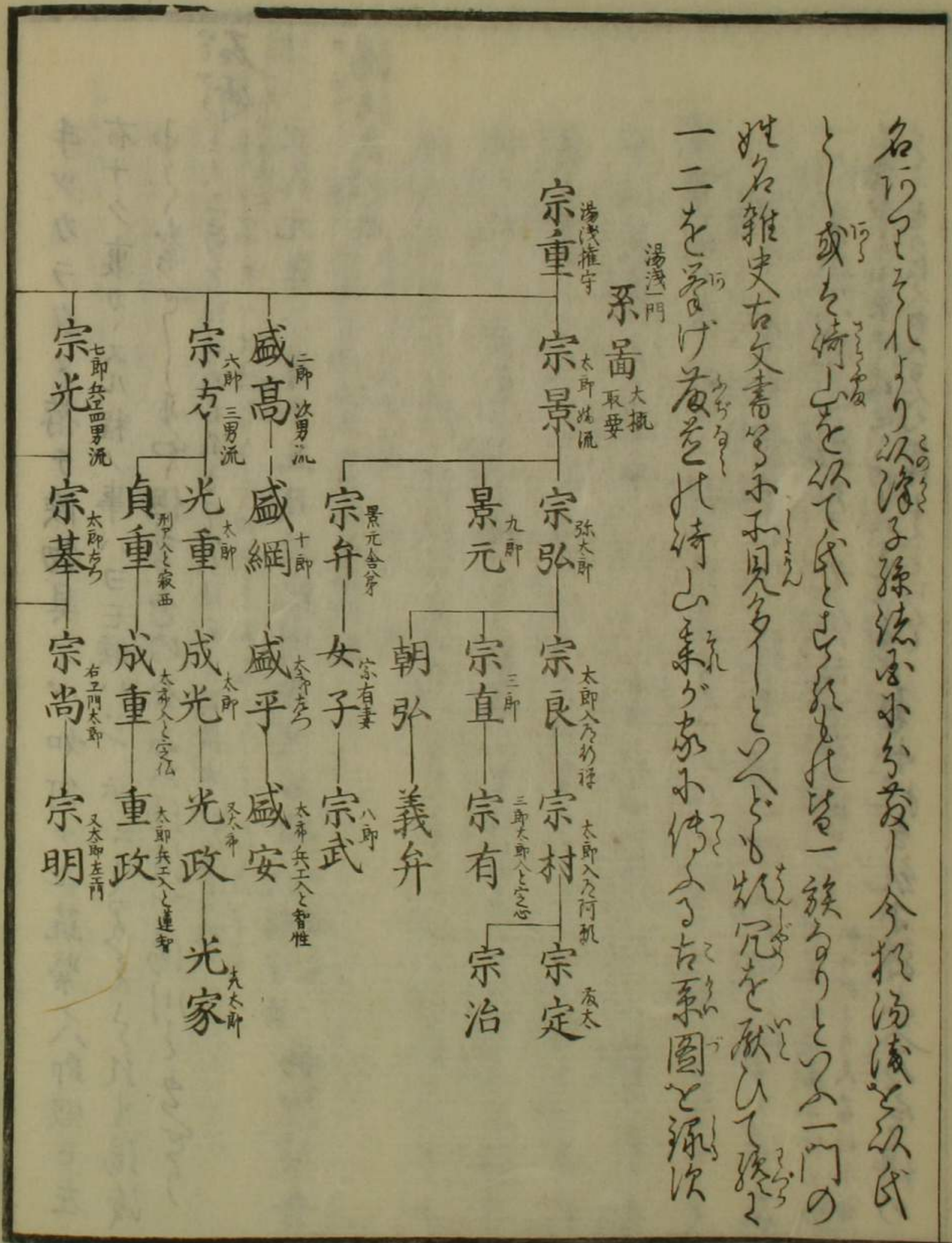
元久元年二月十五日於紀州湯淺石崎 親類宗景 修涅槃會

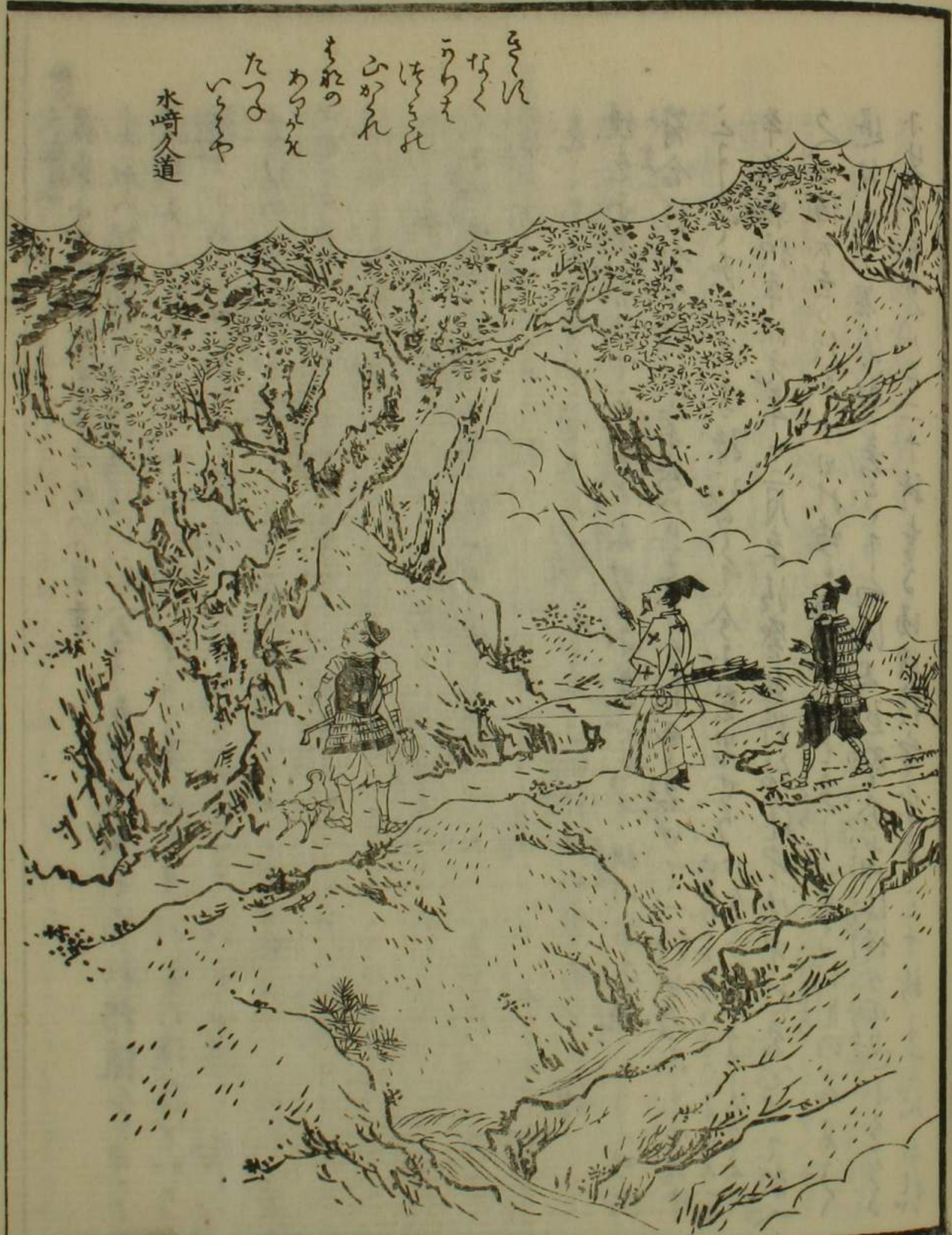
湯浅氏故居

湯浅村湯浅庄町の小湯浅故

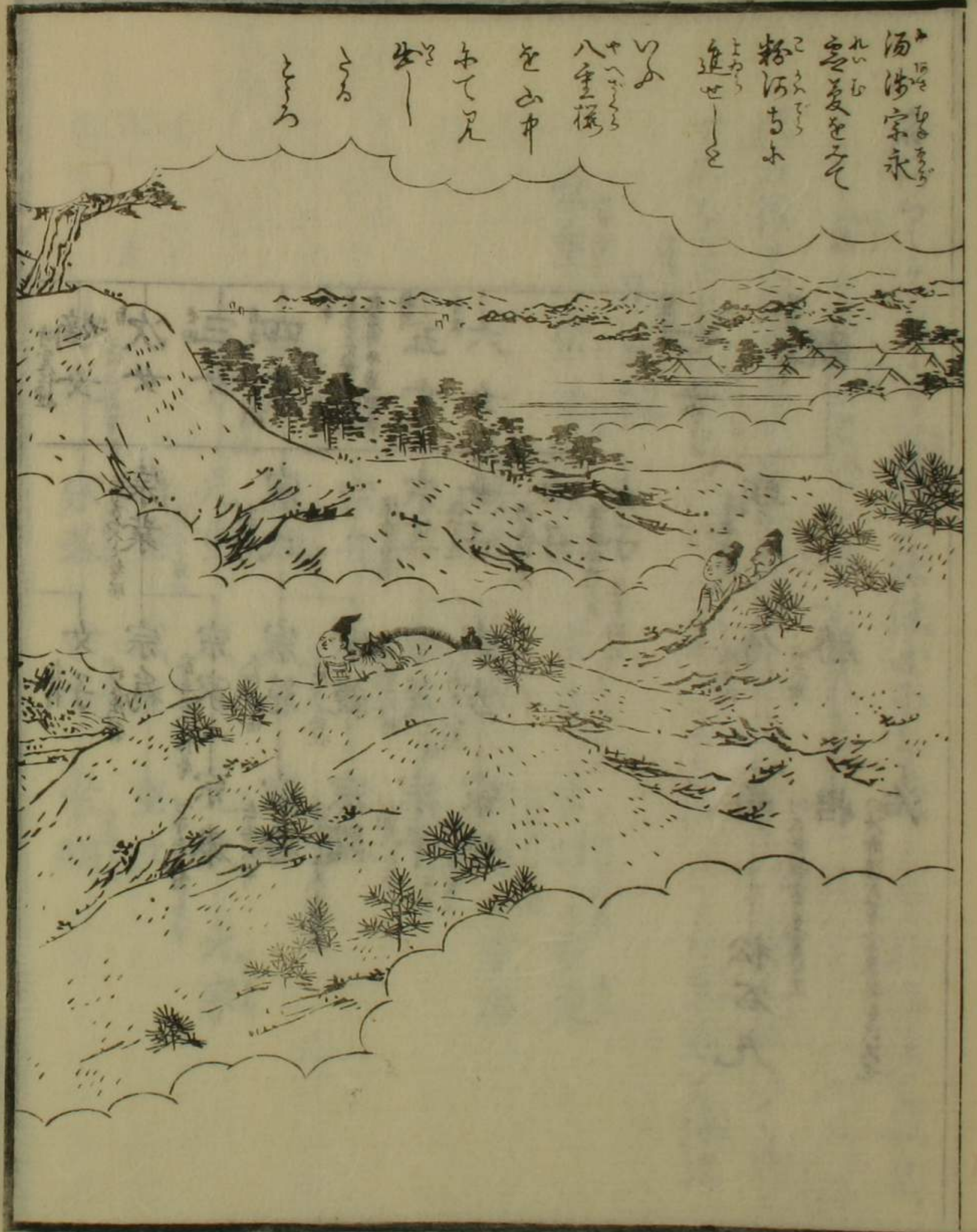
手ツカラタメ持テ候物具ヲバ如何ナル筑紫ノ八郎殿モ左
右ナク裏カ、スル程ノ事ハヨモ候ハジ云云と云えられ湯浅
あゝと書せしめや但書色の本あ湯浅と湯川とせり
湯浅氏ハ孫系とて次法衣氏の内にしるはれらるゝと知ら世に
地小見し武勇とて稱せられ兼和元承永とて人始て
書小見し其後平治の乱守守を以て名天下りて
を以て其高きなる市とて和次市市れ孫蕃殖して數十家
る實全に二年於中一族の連署小十人許の姓を載せしめて
一門系於八條に固とて朝廷と固せり
南小北を以て孫と入る定佛の

名はつとそれより次子孫法ふか友一今於湯淺と次氏
 と或を河山を以て氏とよめられは皆一族ありと云ふ一門の
 姓名雜史古文書字ふみ見多しと云ふも此を以て後
 一二をあげて後を此河山系が家小傳する古系圖と源次





水崎入道
 九つ子
 いらまや
 あしがえ
 まねの
 ぶがれ
 けり
 うらま
 けり
 けり



湯治宗永
 八重保
 を山中
 来て見
 生一
 とろろ
 とろろ
 進せしと
 進せしと

水崎入道

平家捕河赤永二年三月惟盛卿死於流云是ハ當國の怪人湯
淺權守宗希が子小湯淺七郎之湯宗光とつゞもれ也 令文日高郡
宗代王子乃

明惠傳記曰建久九年畧石垣山奥人里三十町許隔テテ符
立ト云處アリ奥アル靈地十リ上人ノ舅湯淺兵衛尉宗光
カ知行處也畧翌年上洛其後又符立ニ柶ム
同書曰石垣ノ地頭職違乱ノ事出来シカバ保田ノ星尾ト云
フ處ニ移リ住申上人有テ他ノ領ニ成シカバ借事有テ又轉

東鑑云兼元四年二月十日紀伊國安豆川左地頭職者故右
大將軍御時為高野大塔造營奉行賞賜高雄女學房訖御素
意被改彼一身之處此間湯淺兵衛尉宗光稱得上人讓狀望
申安堵却下文被經御沙汰以件地頭職不申子細無左右難
讓補輒不可被許容之由雖被御之宗光為御家人有其功之
上准新恩可完給之旨頗依愁申今日被成政所御下文云云

上覺 一本の意傳記不上覺上人を明惠の叔父といひて今系系を按ずるに以て人る
のハ後世の事なりそを引くハ條不本と宗希が子の十三の事なり

孫去入道念佛 て自言して燒死するよし似をいひて其の事なり
ろくく武家上り其孫湯淺孫去入道念佛を地頭職に任ぜしむる事なり

其孫湯淺孫去入道念佛を地頭職に任ぜしむる事なり
其孫湯淺孫去入道念佛を地頭職に任ぜしむる事なり
其孫湯淺孫去入道念佛を地頭職に任ぜしむる事なり

本中不揚へ八人とする由捕爪不才て兵をたの切あへさるゝを
そ儀不揚果を八勢て了不原せ人夫不揚を二三百人兵士に
て本中へ八人と儀捕爪勢を進發人とするよし似をいひて進
そ一とらりた湯淺へ是ををるゝを本中へ二とらりた湯淺へ
そ一とらりた湯淺へ是ををるゝを本中へ二とらりた湯淺へ
そ一とらりた湯淺へ是ををるゝを本中へ二とらりた湯淺へ

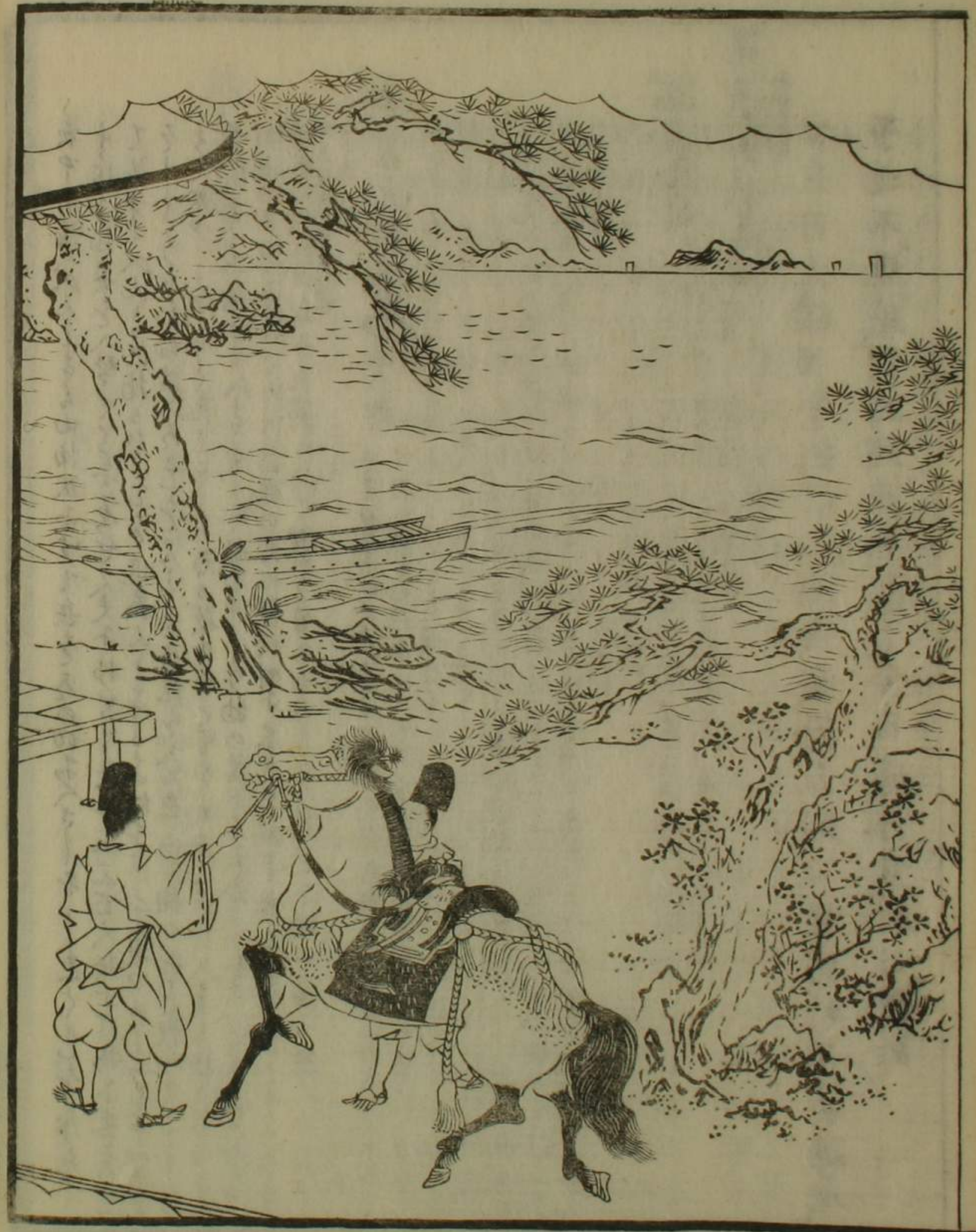
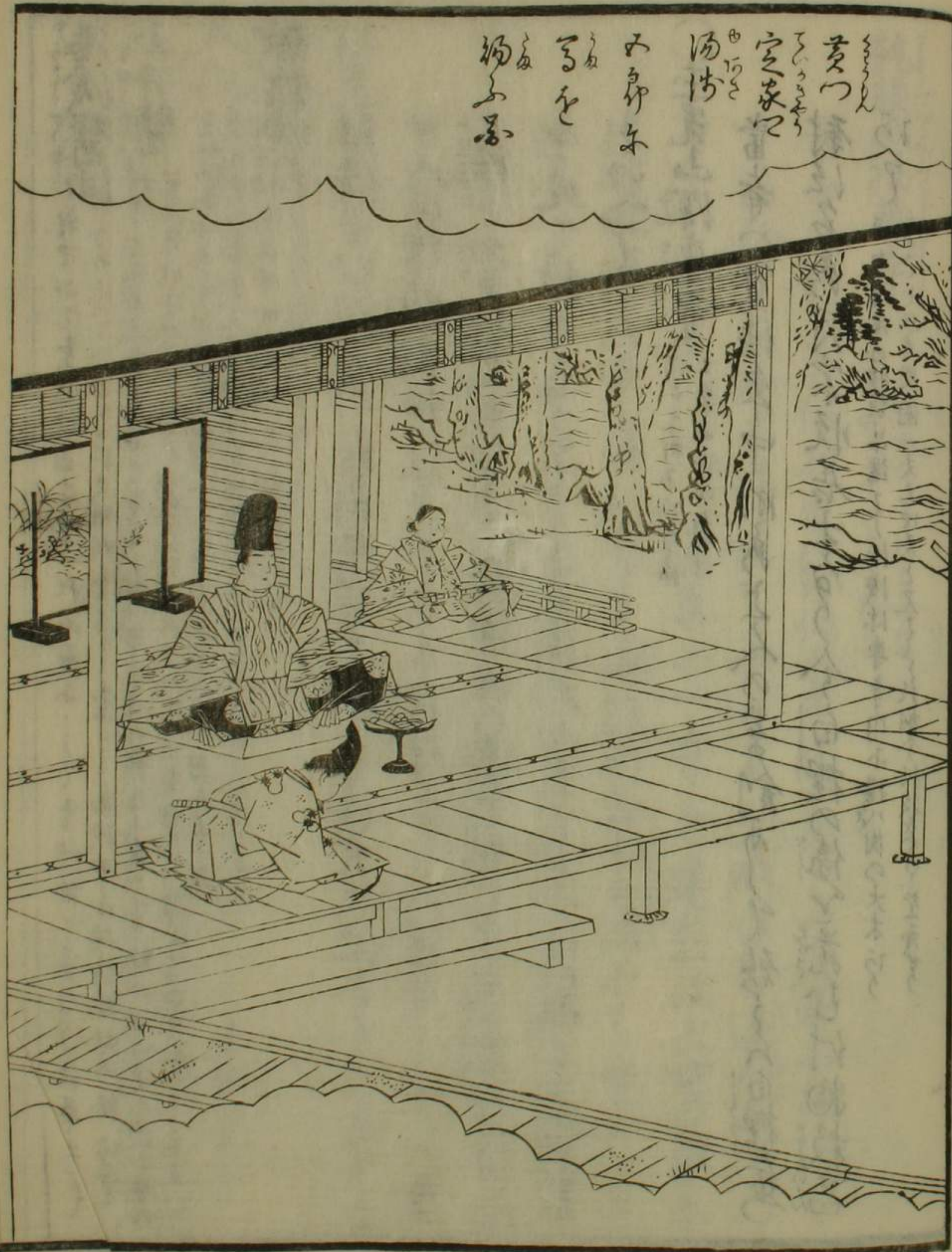
幸宮太郎左衛門 を平記貞和の正月八日正行討死條云和
道附々を以て河内より降来しと云り湯淺幸宮を命たりと云り

湯淺左司 湯淺との事書せりともいひて文帳へいれり
死する畧同云云保あ湯淺八平討る

湯淺左衛門 御幸記云
廿三日天晴畧午刻許入湯淺宿死五郎云男宿所事甚過差
予之不堪感引死殘鹿毛馬了今日適休息終日偃卧

予之不堪感引死殘鹿毛馬了今日適休息終日偃卧

きん
つ
てい
や
の
湯
の
あ
な
な
な
な
な
な



湯淺醬油

村中にて製醸次第不詳一此名産小一して其味極て美なり湯華をん

玉井醬

村中大板屋三つありて製次第山寺味噌の類なり或は山經山寺味噌入玉井醬の

諏訪神社

七月七日に祭り交礼

社傳小じり御射山小ありてを後世以地小つとつと
つは神顯國神社より古き法皇の御時なれば湯淺庄中此産
大神と崇む又云じり此神地の壇を築きて田隅小板の
を建て社々なるる小元源九のりめて社殿を造りて
と云ふ

玉光山深専寺

同中町小ありて法宗西山公なり

當寺ハ寶徳年中明為上人の弟創りて願ふに白檀を
射法名為月宗悦居士より今白檀の徳を流む付物較品
なり

龍頭山福藏寺

同中町小ありて法宗西山公なり

當寺縁起小云伝別當代の信人平林三友とつと者而縁あり
て當郡交京御小移住して其子末文のり君達上人乃
弟子とつと宮原小一寺を建立次と世の縁業
此時永源寺中湯川蓮葉海部新茶浦小て寺地を免
許一寺を建立せしめ法後を免許次天心中當村
小遷一町須合右邊の家次より法後を免許次交を以
下整用おらる

仙光寺

法宗西山公

真樂寺

法宗西山公

幸徳寺

法宗西山公

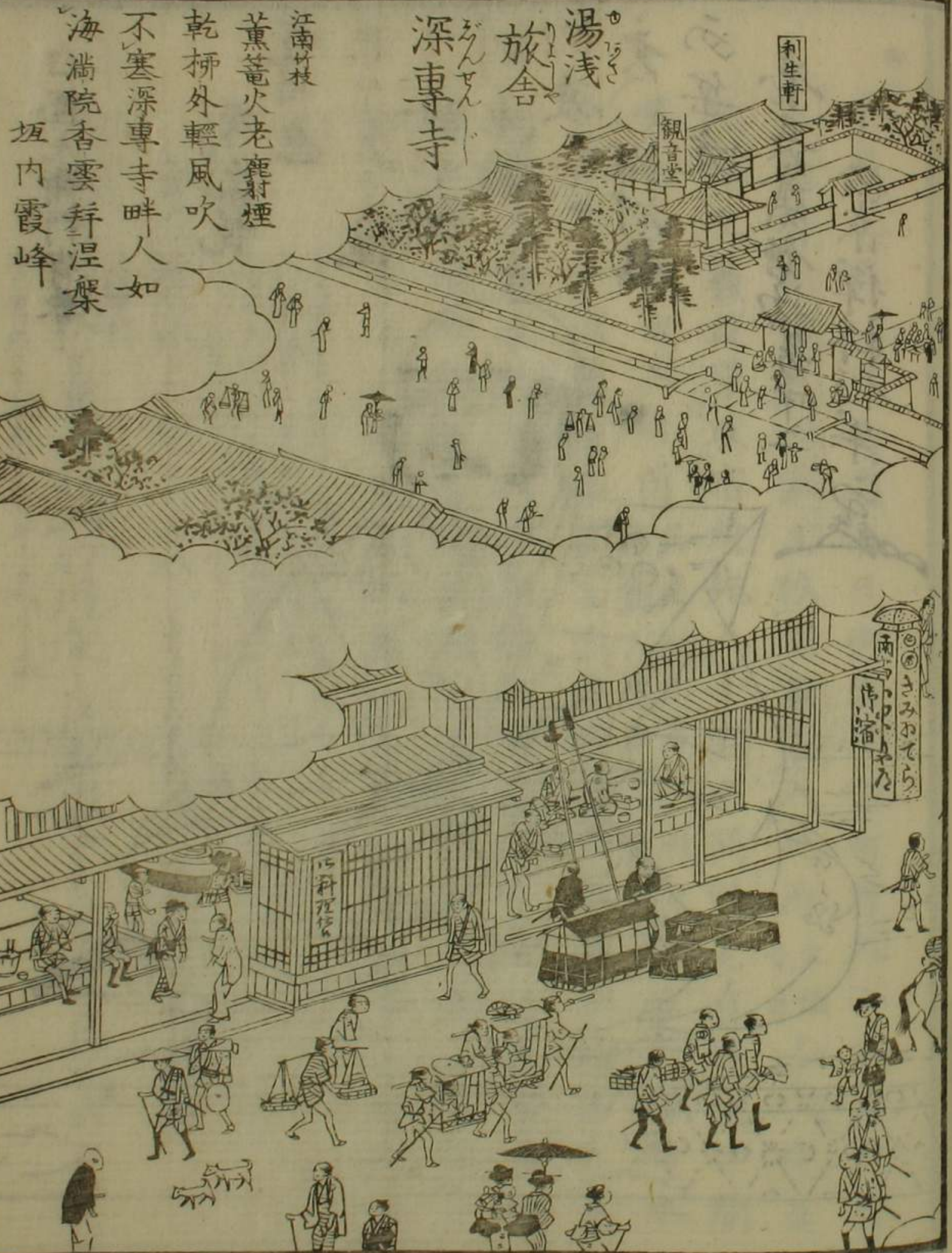
寶林寺

法宗西山公

入江松原

湯淺志小町人の燭人家の末州を南へうけて松原ありて湯敷されあり
系とのつと松原の川のきより來れ方一連の並松ありて入江の松
兼團之保基團の哥ありとつと今乃表原を法宗西山公久世利益とつと
去れ極と

るるり云い



江南枝
薰篋火老麝煙
乾柳外輕風吹
不寒深専寺畔人如
海滿院香雲并涅槃
垣内霞峰



巴

白檜九衛門肖像

孝宗悅

悅目定

花うよこし院

心入法水集

副表遊

側度已心

文○送冲結

西岳道

慶長貳拾貳年申二

治東禅林仁果之



御幸記

十月九日 畧次又過今日御宿三四町許入小宅宿所自

上雖有例假屋此家主依儲雜事入此所音儀カ智先是

又依文義從男取宿所先入小宅之間件宅有憚之由聞

付之仍騷出入此所先達如此事不憚之由雖然臨時水

ヲカキテ以景義令技了又依有所思取潮垢離カク是

臨時之事也此湯淺入江邊松原之勝形奇特也家長送

題二首詠吟窮屈之間甚無術兼燭以後又著立為帽子

如一夜參上小時被召入部内又依仰講師事了即退出

享保七年九月十一日湯淺村の湯を宿しやがれ十二日
入江の松より舟次夫よりつ畧十三日つとめては
を出るんしせし耐忍化のみそりまゝのふあはてるこ
をこしせし耐忍化のみそりまゝのふあはてるこ

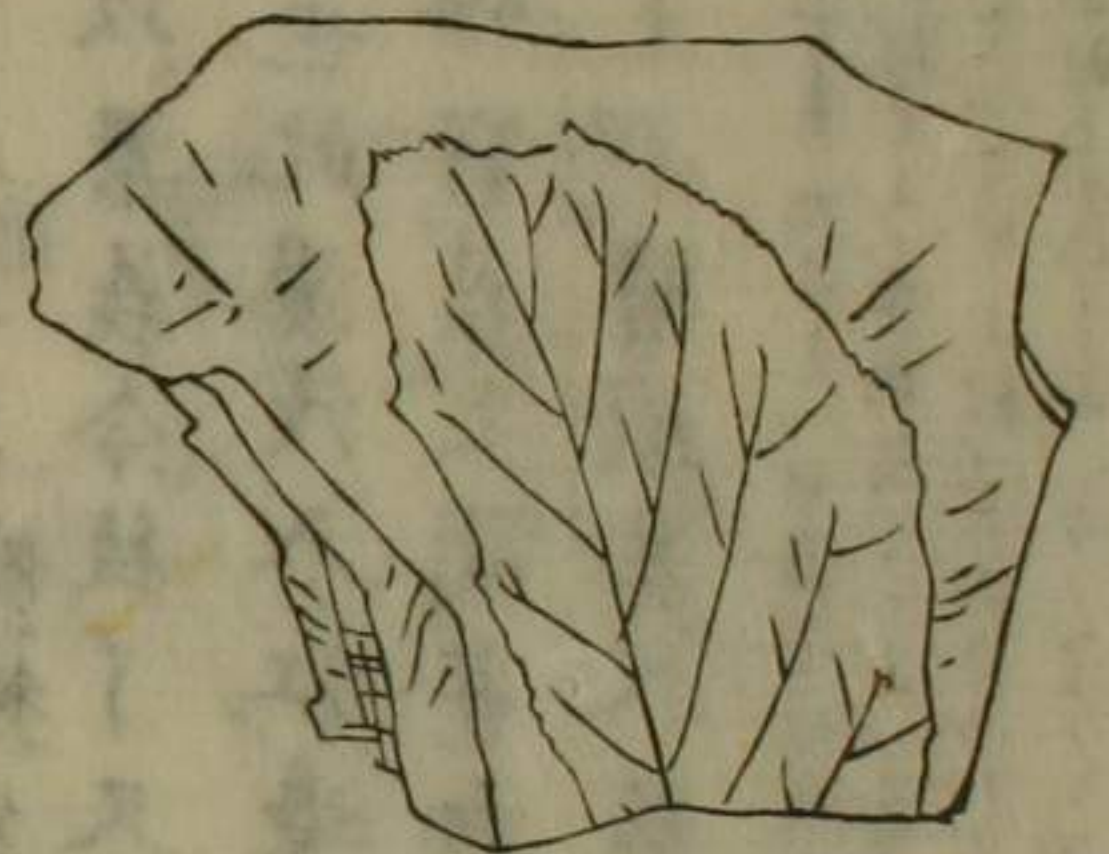
又贈別
玉れ孩の何らんうさうりいさそりまゝあかひのあくれの強

又贈別
又いつれ秋と葉らむ入江川らむれ夜のくらさるれてん

右二首のころをとりて之ハ

木葉石

本系地母産て上母土集り幸と
絶て石は北より南なりや
いりこれを極ま本系土のこころ
主母土交差して恰彫刻皆然
に似たり



石四五五五

かきゆきもいふたきもそら草浪の入りふかき藤屑と似雲

本系石 同村川の傍には石のせりこもる

廢護國山満願寺 同村川の

傳へし 後白河院の勅願所なる先高上人の宗奉ありき

七堂伽藍二十六坊あり小丈の頂より山の僧舎與山

上人豊を園を乞ひて奉堂へ山塚に礎石奉尊へり山二王

ら慈母那を山へ引移せしといふ今彼小堂舎ありといふ

流を別野山薬師院揚楽寺といふ類庵の後深古宗より移し今

擁まる家子正徳二年法性寺末末を在回於寂樂寺といふ山と

河豆川を牽ひ冥東小御より河のいふ 寺文も 所謂寂樂寺

これをもつていふらん當寺より揚楽寺の邊小堂塔の名二

十洋田地の字小御といふ今畧改

白方山揚楽寺 同村川の甲乙海に字西山流あり其より揚楽寺に天院ありて別は山系

流揚楽寺といふは揚楽寺と云はれり其より揚楽寺と云はれり其より揚楽寺と云はれり

類聚一書あり又兼取入る後海土宗此僧其妻せり本其妻也
古に白り付抽十八担大砂の條八幅有り云の西一町許小大つとる字此地有り
白方宿所 今宿有りは務系これと云ふ小い地有り云の西一町許小大つとる字此地有り
上人内侍山小石一此方ハ皆云々不載て後考をせしむ
一本明惠傳記

兼元四年四月民部卿長房卿熊野詣下向之時於白方宿所上人對面之次花嚴金師子章注釋重有懇望之趣

久米崎王子社

別本村の南古より一町許東小町と云復修造の後又破壞して築地のこたり一官命なりて小祠を造つ

十日自夜雨降遲明休朝陽漸晴晝天猶陰拂曉凌雨赴道無程王子御坐云但依路遠向路頭樹拜云ククメセ云キ云

熊野道王子社等破壞奉依法有願可被修造也日時勘文是之其内紀伊國湯淺莊久米崎王子社破壞云云然者為地領之裔假如幸丁寧可被造營之狀依仰執達如件

嘉復二年七月廿四日

湯淺太郎取

武藏守末
修理權左史末

湯淺城蹟 同村の東山の上小い中庭並湯淺村小偏れり湯淺権守宗等こく小松を築く一と云

巳四編四七

花宮三代記云

永和元年九月廿五日紀伊國所楯籠之官方没落之間翌日守護人已下攻入在田郡湯淺之間所々官方城没落云云十月五日日夜紀伊國大將細川兵部大輔使者到来去二日凶徒打取之間合戰大將引籠移云

殘櫻記云

文安元年八月義有王菅原島山持圍入道紀伊の國人等小下知して八幡城を攻めせりと然る小寺利を失ひ

南方揚子雲より吹えけりて細川出羽を差向て敵々攻めれども城を奪て其城を棄てむ

同是湯淺城也云々中回二年同三丙子年

九月島山かの是が衆人抱法去座介ありて守城入る陣網を差きして攻めれども城を奪て其城を棄てむ切ら出されば其子大下討死され守城於河も小楯籠りぬ



靈巖寺
古跡

山門々
つり物々々
一炉菴
凡香

慶雲巖寺址 名傳村を去れる所一里餘の山中あり是れ仁吉の父流と
人の書多し其縁
又文中之に二月未始とつて傳の實基小しと耕をよ

穴地藏 山田より北へ少し行くと、或る山麓にあり、巖の中、小地藏を安置し、其
と、龍湯乃地及西海を去る所にして、古くより傳承せらる。

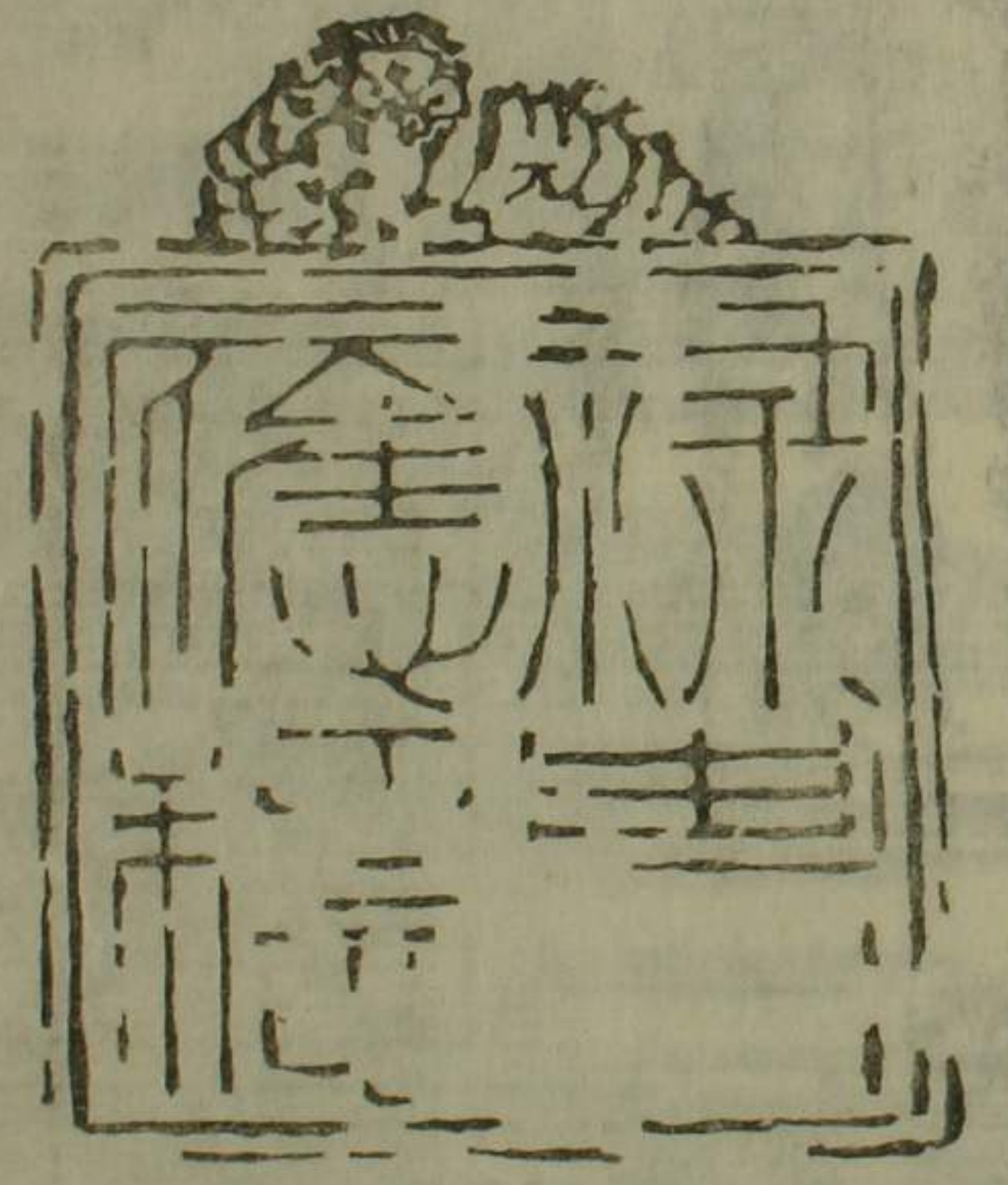
廣橋 伏見の南にありて、十六ヶ村を以て、名傳村の東にあり、其地、
廣橋の南にあり、其地、海に臨み、由良、此際、下り、又、さ、り

廣川 二村の間にあり、海に入る海口、小川、あり、其地、
廣川、小川、あり、其地、海に臨み、由良、此際、下り、又、さ、り

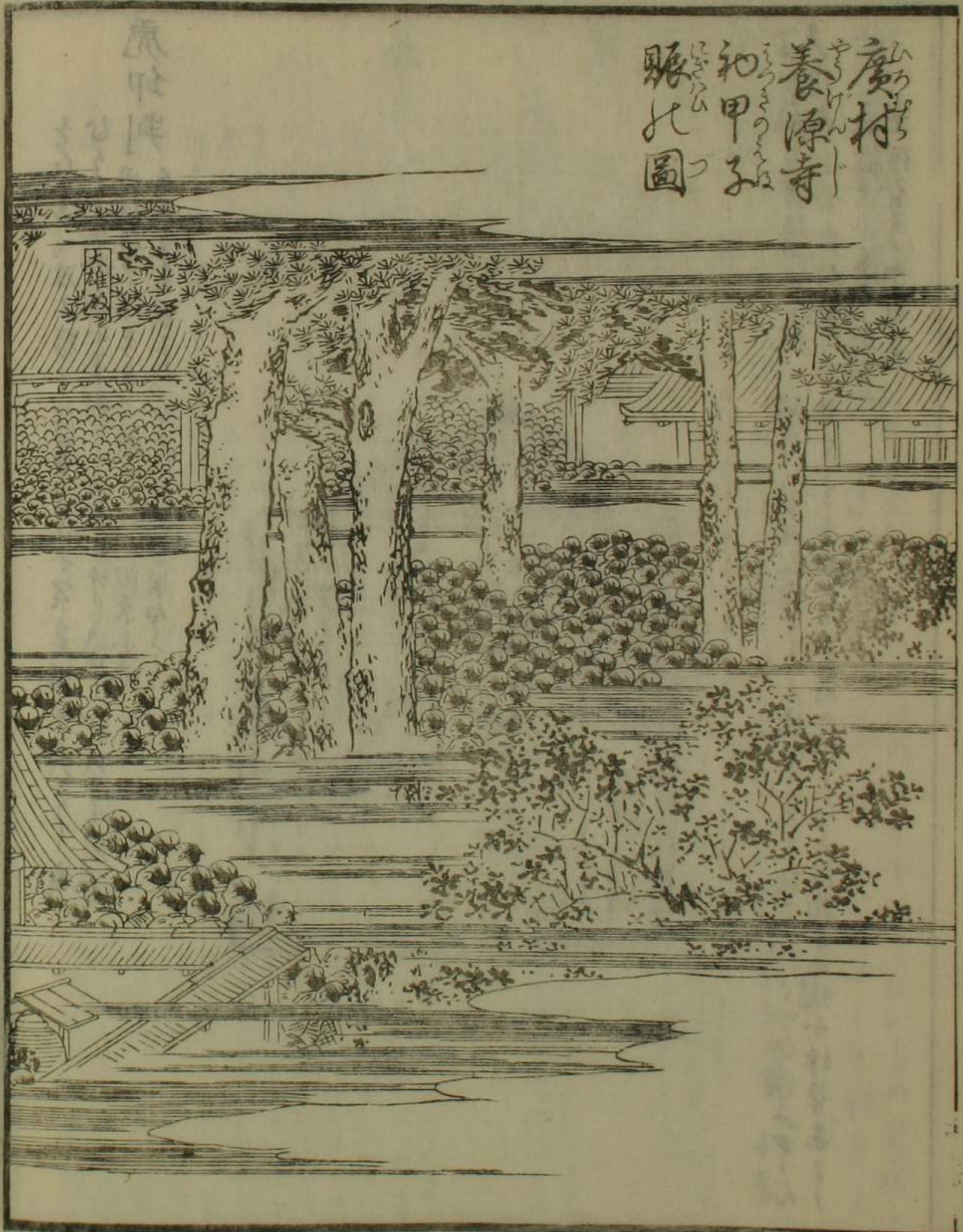
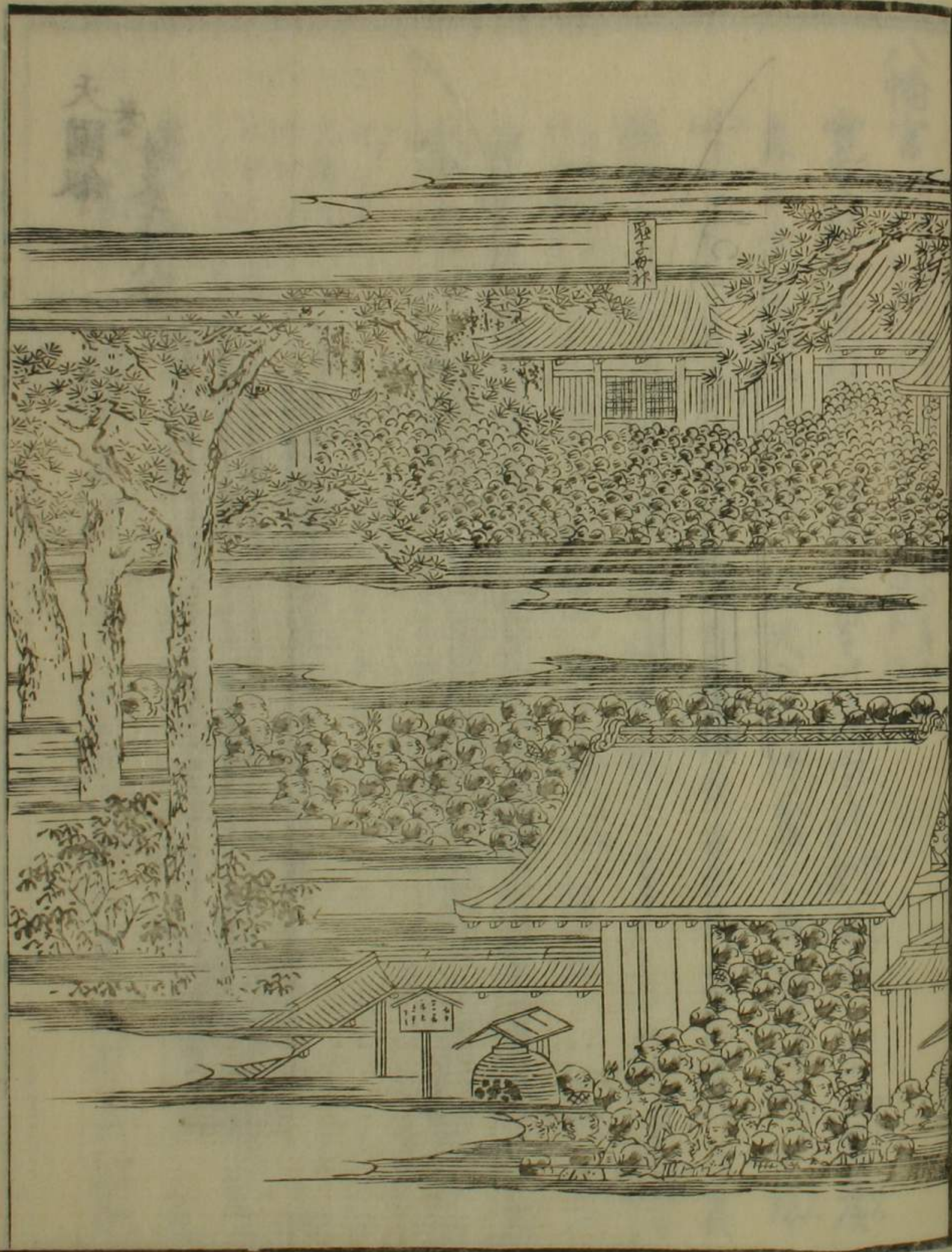
長立山源寺 慶村の北端にあり、法華宗、更、不、能、流、あり、當、り、大、天、を、大、藏、師
法、下、來、の、画、あり、經、沙、日、蓮、の、像、あり、其、地、一、種、あり、其、由、其、二、百
年、前、の、紀、傳、の、記、載、あり、其、地、一、種、あり、其、由、其、二、百
も、れ、り、一、種、あり、其、地、一、種、あり、其、由、其、二、百
年、前、の、紀、傳、の、記、載、あり、其、地、一、種、あり、其、由、其、二、百

を以て、法華宗、更、不、能、流、あり、當、り、大、天、を、大、藏、師
法、下、來、の、画、あり、經、沙、日、蓮、の、像、あり、其、地、一、種、あり、其、由、其、二、百
年、前、の、紀、傳、の、記、載、あり、其、地、一、種、あり、其、由、其、二、百
も、れ、り、一、種、あり、其、地、一、種、あり、其、由、其、二、百
年、前、の、紀、傳、の、記、載、あり、其、地、一、種、あり、其、由、其、二、百

虎印判 同村、振、源、系、を、藏、せ、り、其、由、其、二、百
氏、の、文、書、教、を、以、て、以、判、を、用、ひ、り



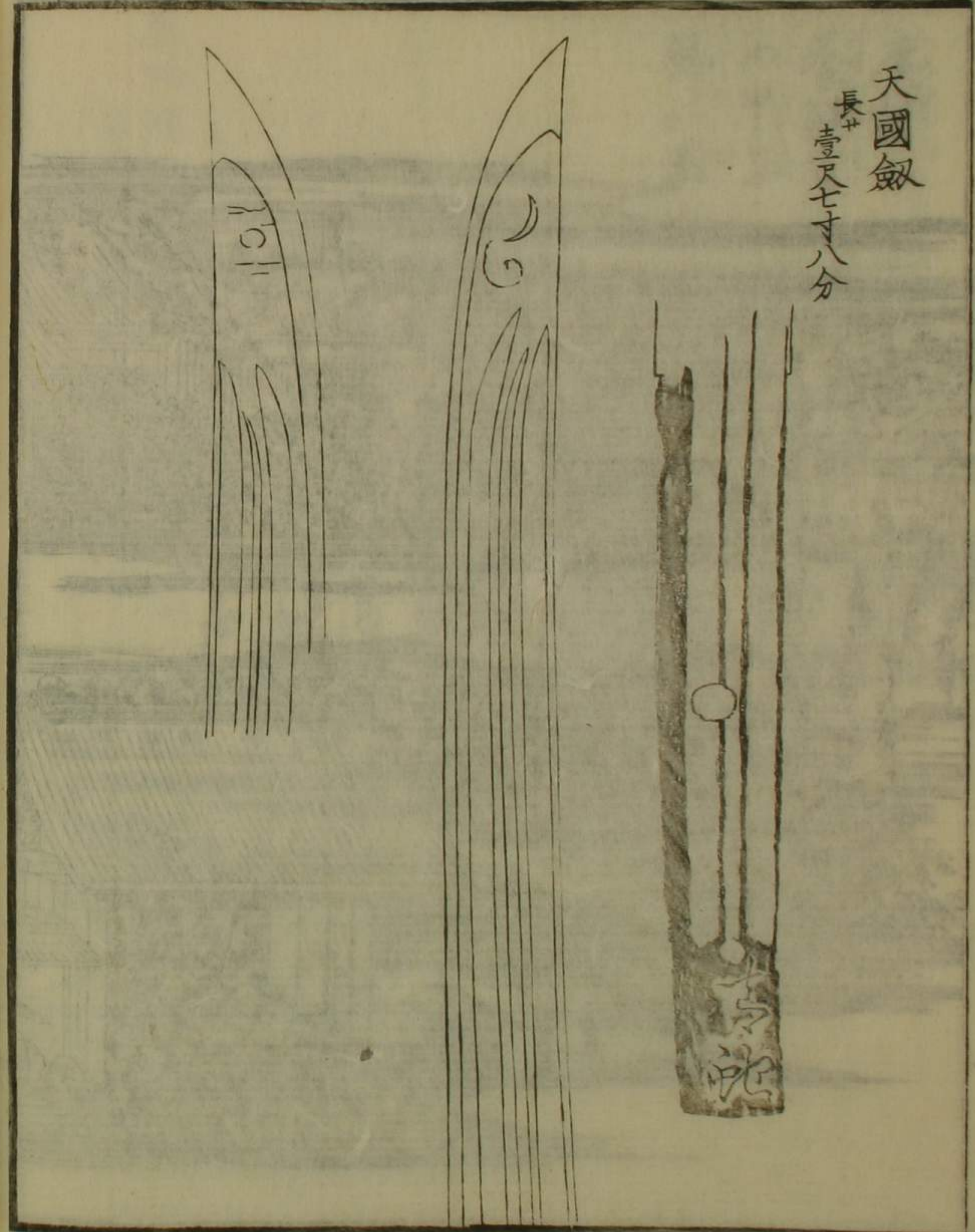
天國 同村、河、川、長、大、を、藏、せ、り、其、由、其、二、百
氏、の、文、書、教、を、以、て、以、判、を、用、ひ、り



廣村
養源寺
和甲
縣北圖

天國劔

長 壹天七寸八分



八幡宮

中野村小のりや在中七ヶ村の古寺古社
有り文目八月十八日了証及四年のりや

寛文記小當社々

秋の天宮に神宇に創建小一ヶ古の廣

名二分一を以て社領と次又云は神劔を前田村莊中の村名小徳

世せれを慈永の頂以地の古家梅本号えとつゝ者りり其

願せし地を社地とありて社を遷し今相殿の御小寺れとつゝ

と意の地とありて是の社にり固く前田社を奉山八幡宮とつひ傳ふ又

衣字に八幡宮と知清せりともつゝ然く奉山小サリおるハ衣

字よりこれ知清せりハ地の社を奉山より遷し遷寺れ子

けれ遷一 慈永二十年癸巳二月送美の棟札にハ以時始くハ地小遷せり

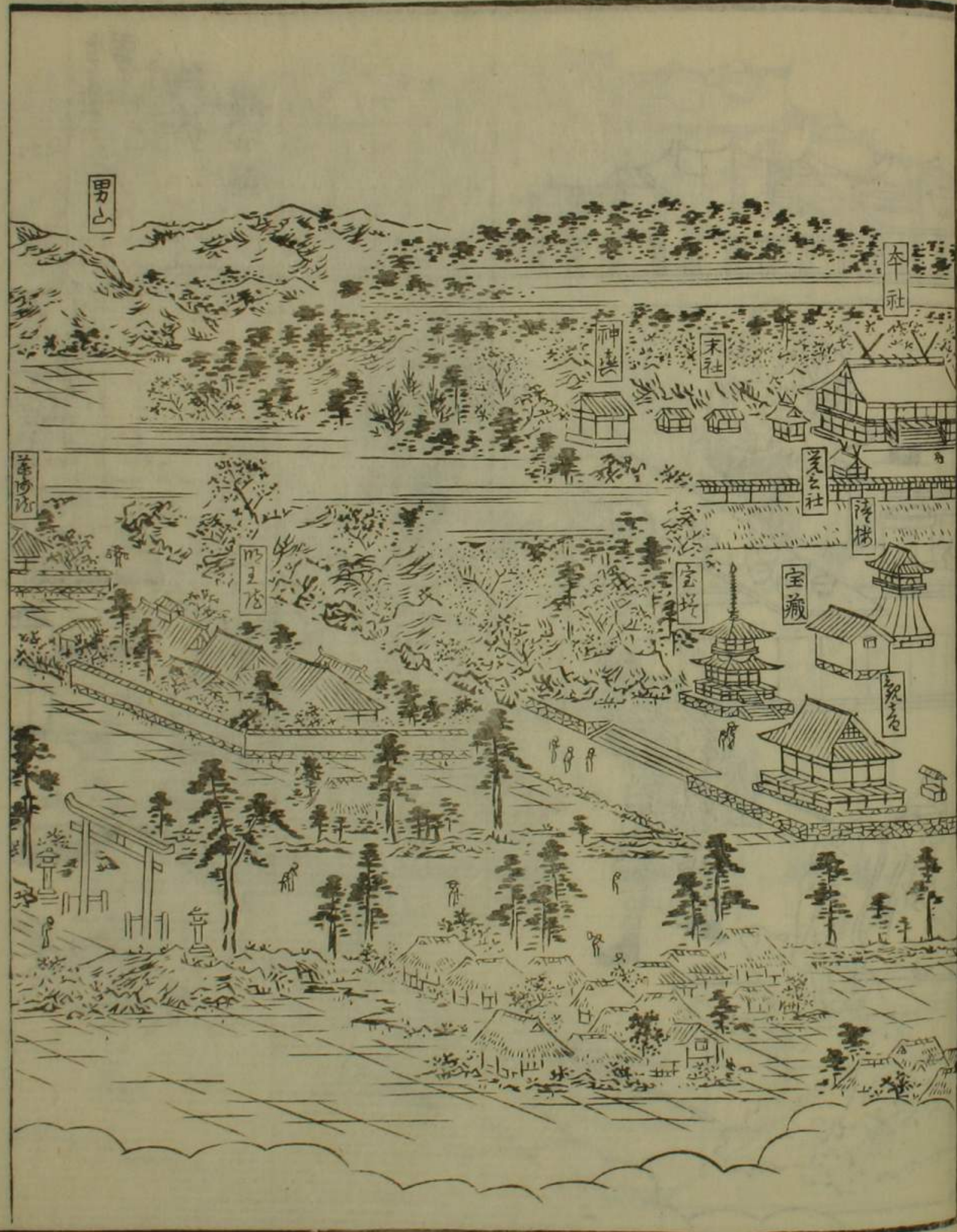
元龜文祿等の棟札にハ棟札の文小ハ天女以赤小ハ地ハ乃

沖原あり一ハ天女の以よりハ海川氏以地を依りハ始りハ

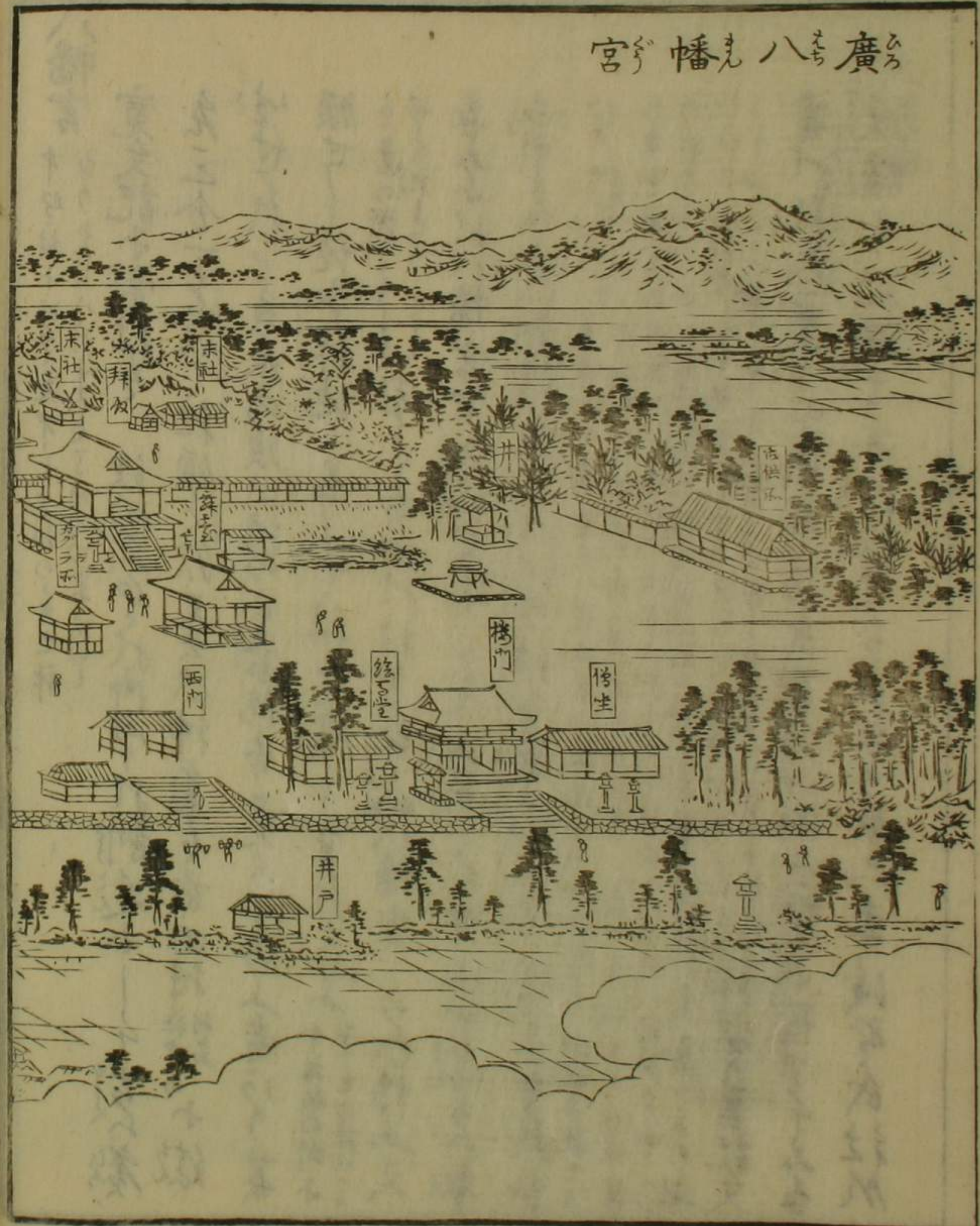
比永氏を社勢ハ一津守氏を公文と一ハ井中氏を社と

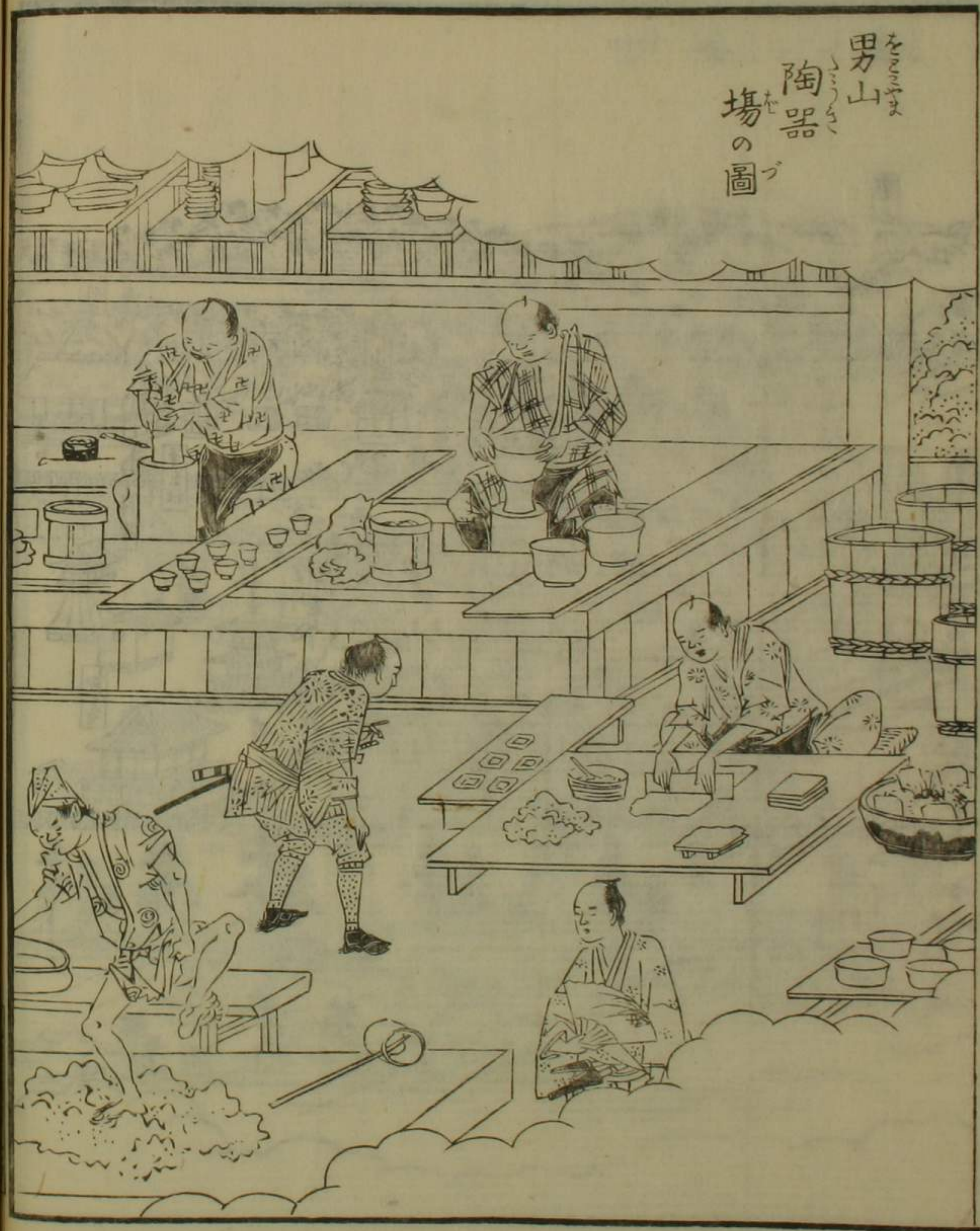
書にハ天正十二年癸巳氏前ハ儀の時ハ變小ハ羅ハつてみる

灰燼一社領も亦没収せりハ子長と長と年淺野氏社ハ

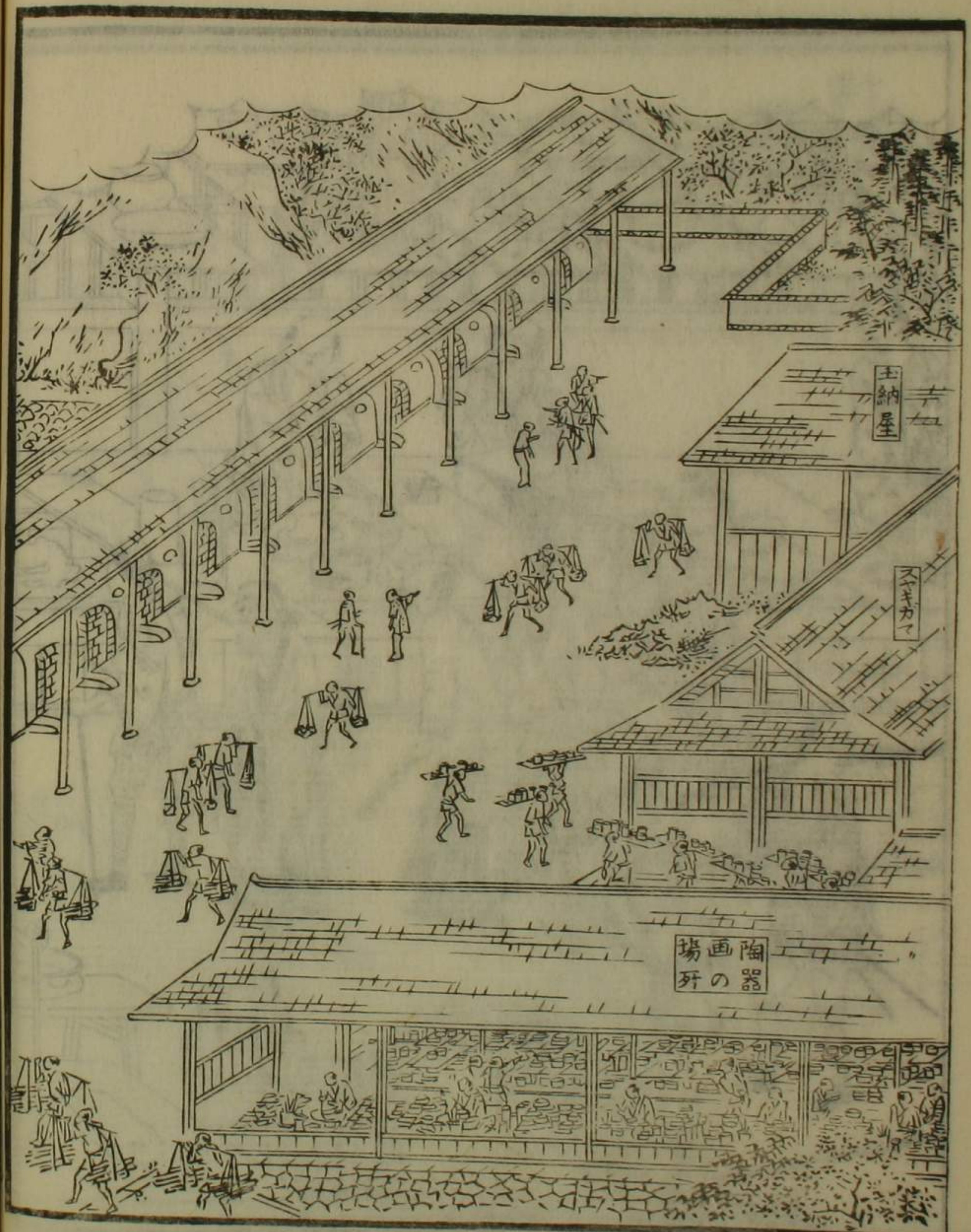


廣八幡宮





二 其



十石を寄せせし名元和以淨是も龍田ちゆうでん—あひ更さらお令燈
 執石燈籠弓汲画馬戸帳の執教品を寄附—あひ更—又津
 庫小藏こくらるふ古守の紺紙金泥こんしきんじの法華經ほっけきやう及大般若經だいはんげきやうの古書
 六百卷河内を末小藤原承德皇徳等こうとくの年月を書次しやくじ早
 懸かへの年尚社しやうじや小初こはつ而此こゝ浦河うらへて引尾立神社ひきたてじやの雲うゑおと
 畧似りやくしくくし此こゝ浦を弓ゆみけく三さんッパラとつ其その義ぎを知るもれ
 び—今按いまおしどれふ三さんッパラと志し駒良こまらとつ古ふる云と龍りゆうもる
 るべ—
本はれ方女小字を抽つうを小児小敷ふを 志駒良しこまらを史
シツタラとつみと志駒良の龍もりうん
 官記天慶八年七月の條小志多良神の神輿かみこ三節さんせつと荷に檮こひ
 幣はにを掲かげ鼓つづみを執とりて秋あき祭まつり—羅ら列れつ志して拵せう津つふよる敷
 千ち系けい入い石いし法ほつありなり小こ玉たまるる小こ漢かん書しよ—其その時ときの秋あき津つ小こ志しく
 おし津つ々つ宮みやふら川かわ家いえらふ命いのち子こ栄えい志しくくめとつんしんり
 今いま七しち薩さつ摩ま小こ平へい軍ぐん神じん社しゃの祭まつり小こ氏うぢ子こ宮みや團だん繞じやう—とつんと下

ちて拍子ひやくしをく川がは浦うらへ其その備ひ款くわん小こ志しくくくくとつん
 河内かわちは是こゝを合あはせく其その名なを考かんがふる小こ志し多た良らを即すなはち
 を垂たらしめて考かんがを抽ひつるあつあつ漢かん書しよ—又風俗款ふうぶくわん小こ志し
 くくくが舞人まひやくの一事ひとことれく衣いを九く入いそいと姑はは—小敷こしき小敷
 おぬとておがれよまのか姑はは—くくく人ひと志しくくくが舞まひ
 目め—款くわん備ひありていれ意いをくくくありても意いを乃
 浦うらもとて家いえ方かた小こ来きたらゆるを娘むすめありたふ然しかる時ときを以
 意い新にいむれ聴きけり—を考かんがびんびんを抽ひく意いを—くく
 姑ははあり—くくく—
俗小大敷をシタラ法ありけり今。夕立をもちらえ
 て面沢小敷あせしとくを越れるあき—くく
 おやの大人と
つみまきつらつ
男山濁湯をと 慶八帳けいはちちやうの境内けいん小敷こしきありて事こと百間ひやくかん敷しき小敷こしき十間じゆかんの地ちを濁湯じやくたうと
一月いつ女むすめ入い目め 官評くわんへう河内かわちの海うみを志しせしよる年としく津つふれり磯いその
一月いつ女むすめ入い目め 官評くわんへう河内かわちの海うみを志しせしよる年としく津つふれり磯いその
上を築つくるるを志しく地ち
 くくく日ひがれり志しと名なづく

敬白

天満宮内

宝前寺進

應永十八年

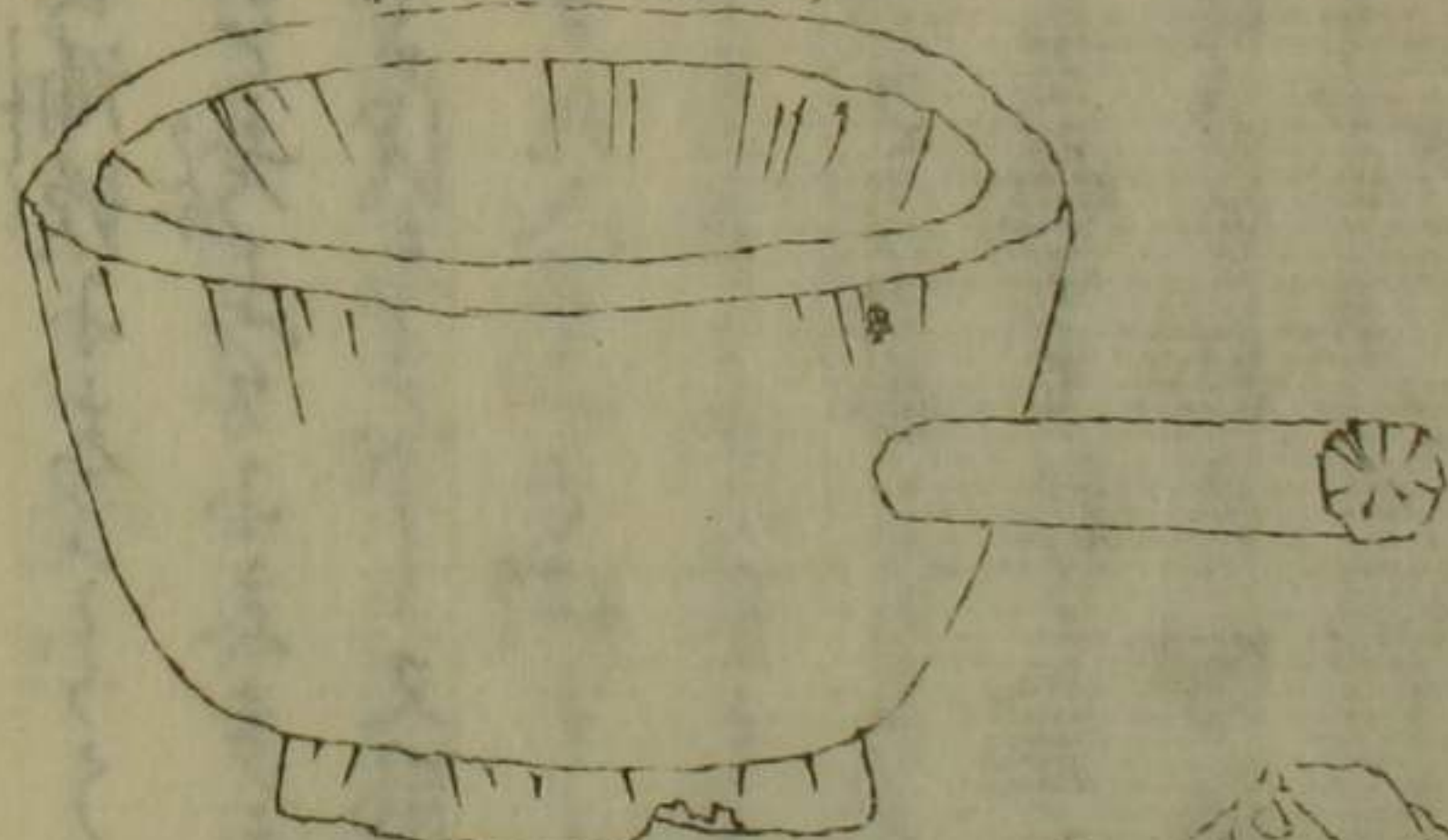
了意

卯六月一日 敬白

音田山天神社藏神符印
印色池

印色池の振り銘あり奉招
して器の上に乗る

豆 二斗
フキ草 七分
廻り 二尺
高 三寸五分
柄 六寸
分 八分



分三寸三耳ノコ



玉長寸六分

長寸
四寸
八分

池邊山法藏寺

同村小川にて浄土
宗西山流より

永享の頃池小津守浄道梅本又言とつふ二人の古豪家地及山林

アテ惣持寺此宗祖の寺和尚小津依以後の和尚本山の澄

開り此を承けて附とつふ二人の古豪家地及山林

為平を寄附とつふ二人の古豪家地及山林

坊今皆廢故以又末寺二十又ケケケ

附状等河や慶長十二年渡野氏寺傾七石を寄せし先

和の流も流用せし縁園中不敬とつふ二人の古豪家地及山林

樹りつとつふ元和の頃 園君所遊遊覧のやをのひつとつふ

そそ本流の頃の丈風不倒れとつふ二人の古豪家地及山林

天神社 意村の乾乙田山とつふ二人の古豪家地及山林

立神 西意の神符印と印色池とを裁む共本意ありて古色なり神とて田とつふ

全と御 西意の神符印と印色池とを裁む共本意ありて古色なり神とて田とつふ

○貝化石 西産村鑿の山小石路の北石多く

○鷹鳩 西産村の北石より二十八町小石路中北地浦とつ入後所北風の附一

○鷹鳩 移以は鷹小舟

○鷹鳩 紀伊國志志としてその石と文札の

○鷹鳩 玉葉集

○鷹鳩 紀伊國志志としてその石と文札の

○鷹鳩 高舟上人

○鷹鳩 高舟上人

○鷹鳩 高舟上人

○鷹鳩 高舟上人

○鷹鳩 高舟上人

○鷹鳩 高舟上人

○鷹鳩 高舟上人

○雁頭山能仁寺 名清村小あり

○井關王子社 井關村北の入口小あり

○井關驛 湯原より

○井關驛 湯原より

井關阻雨

離家繞數日便抱決旬情山林秋容老村烟暮色横

吏事青山遠病中白髮驚雖非異郷客幾度計歸程

○井關川 井關川二村の

○本山幡宮 川原王子より

○川瀬王子洞 川瀬村の

○馬面王子洞 馬面村の

津本坂 川根村の北に在りて津本坂と云ふ 八ヶ岳の麓に在りて津本坂と云ふ

上草灘 中村小川の北に在りて上草灘と云ふ

孫滝 中村小川の南に在りて孫滝と云ふ

松廬遺稿

紫鐵如飛巖勢橫 瀑光觸石濕雲生 只看百尺寒冰立 中有奔雷劈岳聲

日暮秋溪聲益雄 急湍豚石捲 回風板橋與水纏 三尺人過珠跳玉碎中

岩洞 中村小川の北に在りて岩洞と云ふ

先負八幡宮 中村小川の北に在りて先負八幡宮と云ふ

觀音堂 中村小川の北に在りて觀音堂と云ふ

鹿瀬莊司 中村小川の北に在りて鹿瀬莊司と云ふ

鹿瀬山 中村小川の北に在りて鹿瀬山と云ふ

十日 畧次又攀昇シ、ノセノ 山雀鬼嶮岨 巖石異昨日

庵主 中村小川の北に在りて庵主と云ふ

宿鹿背山下 中村小川の北に在りて宿鹿背山下と云ふ

昨夜雨蓬沿海 煙峰迴路轉上青天 江山不許還家夢

才過波濤又石泉 中村小川の北に在りて才過波濤又石泉と云ふ

夢入梅花憶舊遊 吟裝更逐冷雲流 春風可笑客衣敝

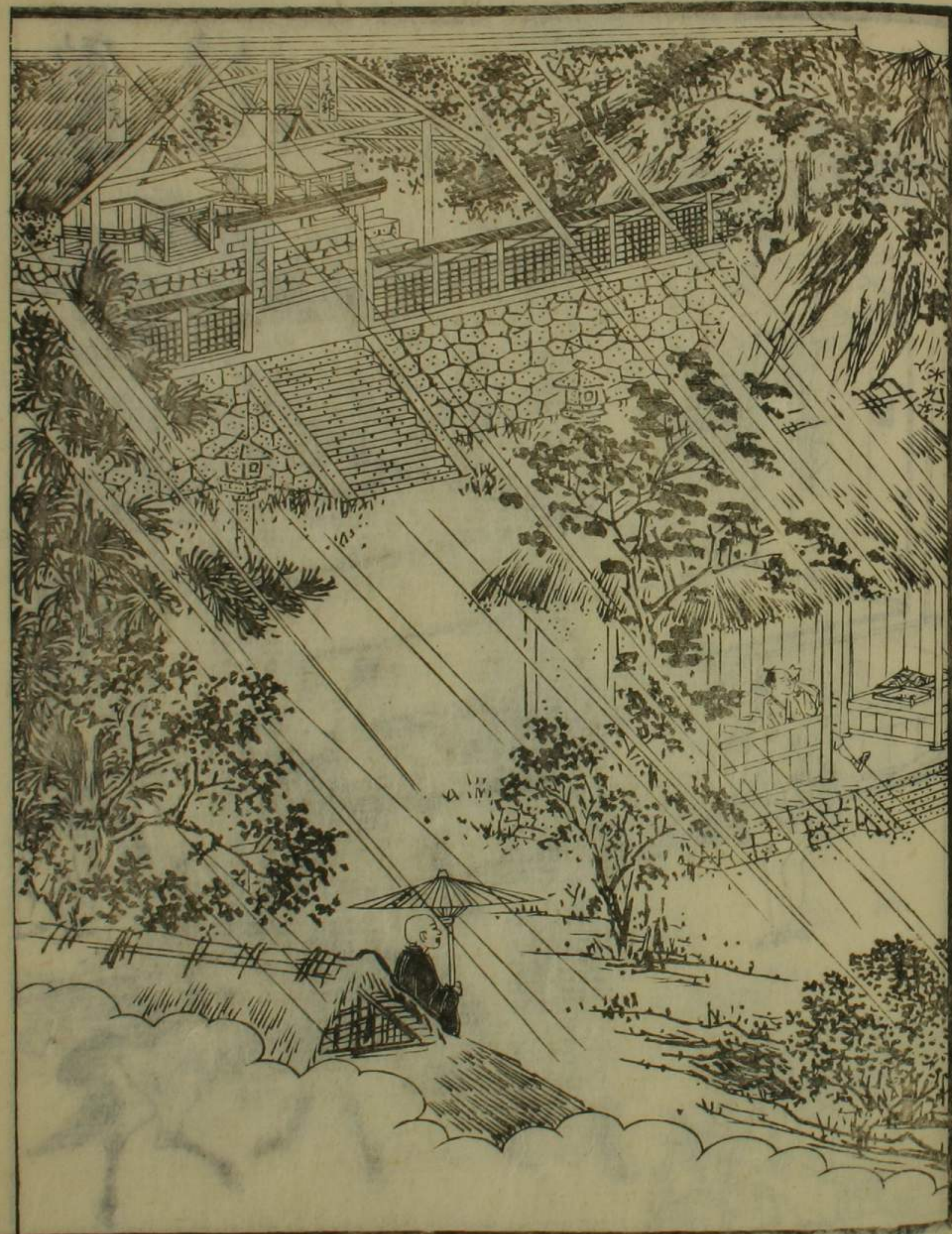
孤劍又過鹿背岡 中村小川の北に在りて孤劍又過鹿背岡と云ふ

祇園源瑜

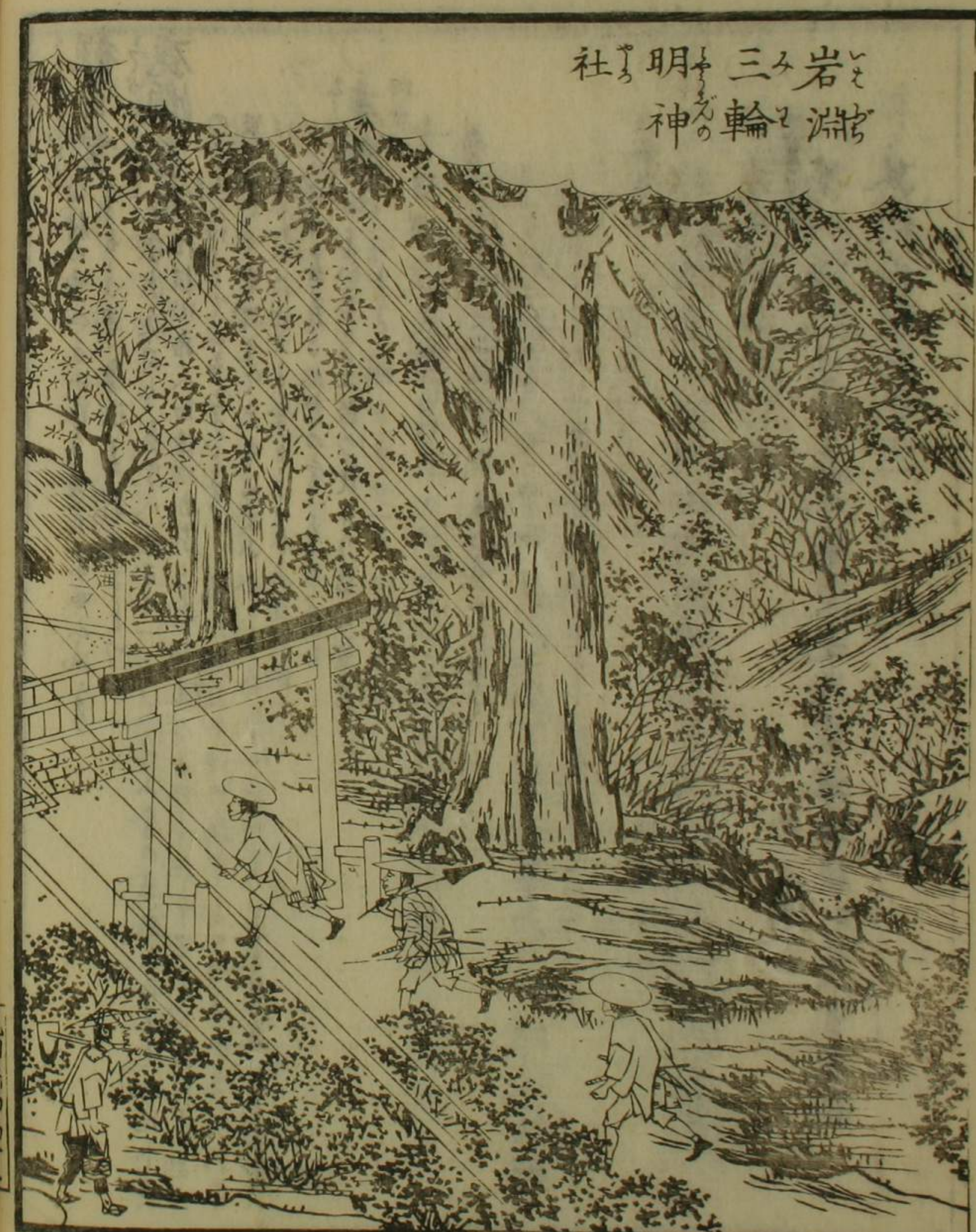
野呂隆訓

南海集

松廬遺稿



岩三々明神
淵輪の社





あぐせしげ
鹿瀬峠

あぐせしげ
あぐせしげの
うしろみち
くれて
まが
らふ
いほつと
みだり
小舎美孝

○井関山 名

新説古今集 かせらふとて

今按名蹟考不似人然即之すぬア一人がれがその時

夫木抄 るてとの山

天の河井関山のそねよるにれよの氣をきこひ 光俊朝臣
初白を河内天河とん海ひがめくみせらふを夫木抄
河内とよれどもこころ天上の紙河まく井関八郎の命が

○鹿背城蹟

鹿背城蹟 鹿背城蹟 鹿背城蹟 鹿背城蹟 鹿背城蹟 鹿背城蹟

治兼四年九月三日 略傳聞熊野權別當港增謀叛略人家數

千宇鹿瀨以南併掠領了

同五年九月廿八日 略傳聞熊野法師源一同反了切塞鹿背

山云 傳小 鹿背別當次第

○法華壇

元亨秋書

釋圓善遊熊野肉脊山卒其後有沙門壹睿者行宿山中中夜

聞誦法華其聲微妙睿以為先亦有人宿一卷已禮拜懺悔又

讀一卷每卷如是天明無人傍有骸骨支躰全連青苔遍鎖似

衣服想久經歲月觸體口中有舌如紅蓮睿見之感怪欲視所

由次日不去入夜誦經如昨至曉睿起拜曰既誦經必有心語

願聽本事以傳靈感骨人答曰我是台嶺東塔院某也至此而

死生平起堅誓誦法華六萬部存日纔半數而天願力不接住

此尚誦經耳今已始終居此不久去此當生兜卒內院睿聞了

禮骨人而去翌年又來不見答骨

○海劫

立田日吉お那の石小種すれ衣衣由良二名小なる海劫の地ふつと

○衣奈莊

衣奈小引の三村湯屋の海河ふ小南一て矢持彦浦等とを小討せり立四郎



通カと
 えかれ
 こらうん
 ち
 よせ
 ともわ
 へん
 へん
 えむ
 拾栗山人



えみうらわうら
 衣奈浦蓬萊の圖

三尾川村中丁下條

由良坂 在田那西尾村上中島高野畑村ノ楮

惣持林寺 三尾川村小

蓬萊 日村の海上小島あり其の形宛ハ鷲若小島を覆ふるが如し一連
末首の形をせしむる巖欠概トてつくり觀望を授むるとも此寺

衣奈浦小町云云

衣奈八幡宮 中比表土祇園

本社 方三間 末社 若宮八幡宮 武内社 佐吉社 天徳宮
子安御養社 牛王社 松殿御養社 石清水社

長麻 御供所 神輿舎

境内山林 東西三丁南 北比丁條

日本紀 神功皇后紀云命武内宿禰懷皇子横出南海泊於紀伊水門

略 皇后南詣紀伊國會太子於日高

古老傳云 應神天皇此御社當於大引浦小島一丈より

上陸し多いて此地小形を建てて志す

古人尊ひて之れを此御社を造り後世八幡宮と云ふ
崇事なれや又中古此御社中を衣奈八幡園と
謂ふも多し男山小邊ら勢多し十六日
貞觀二年三月御殿の柱立を此あり建曆二年九月
女七日改造せり其碑石の外小一の瑞石あり此地も瑞
らせ給ひ一耐表せりひる石ありとついで
ひる大二本浦小 今比大引の御社 天皇と連
へたり丹き給ふ御社を造りて建曆二年
志守小登美の姓を賜ひて子孫を此地の下司職と許
し之れを御社と云ふ 若守此後今上ノ御社
ら此を御社と云ふ 御社一人を重く御社一人を重く
圓子ハ八幡大神也 應神天皇此御社を造りて
其始 政明天皇此御社を造りて

して大神名を度幡八幡唐なりと神託しあへり
 けいひ佛垂佛經歸國より 皇國子傳来しはこれ神
 玉を子けりい 天白此恩頼ふよりそてかきる夜を傳
 へしるるるこれ徒言謝をて遂に佛及法儀の大神と
 稱し天平廿年東大寺に法守小知信し天意の初
 爰子上云志て懐小を重驗威力神を大菩薩と稱し
 されふりしとされも是亦以法儀なり時子年やて
 漫子しひ出され例の僧徒の妄誕をたれは是より
 吾子八幡大菩薩とも稱し初より然れども上古より
 大事りれは中より依文小を稱しりて新類も
 してて武るるを字するの神ありしをば於延の号段大
 うるるるざれり史典小傳より中古源氏家於氏神
 号と字と志て武勇地小傳より源氏の士孫小

八幡宮縁起一箇

此れ神を信し鎌倉以降小至して天下に貴姓一級より
 崇して今日小至れり小法此守護地取或を主
 社小配祀し或は新小社殿を造りて大小の宮社あり
 了免藩せり當社と正し一應仁天皇此宮ありて
 後垂御法の社地とてつと美多れり乱世と傳くは武
 尊も廢れり多り多うはべり一矣小傳むべきなり
 花山院の龜木使の筆小志て後志地有り書解ん松を
 也まらめり神の頂に縁起垂連のの靈命ありて衣を陸園小種也乃
 因縁ありあらる一志うれり大菩薩のの迹を於十條御所の源記小
 こしよりぬりしつるる子改地せん子つとおもひて第月をかくらぬ志
 ぐり小意亦度展の秋前妙光を院和尚智略小位持し多ひて此地近
 焼けれ小よりて秋後又和尚の靈命をかきて靈法再と小おとすこの
 子神也小真合せり一の奇瑞ありけりしやましく筆を法むしより句
 とおもひて此堂小おとす此れ小聖年辛巳七月廿七日自取瑞多のり
 何や何とてかくるるる小よすり法はささく小およすり靈感くこかひ
 る一信心これありしりく小法をて神懸さく小およすりやすいさう
 とめきく筆法これ不用小聖業を自せり和尚又陸園の條料紙を細を
 けりめく畫工小深して墨法を打せり聖徳天皇元年信子功をかくれり又
 傳也まらめり一者命り甲まらまら眼疾りありし小金か

黒島

鳩の東南方

王舎山にて

一大洞窟を

舟に載せ小舟

を寄る

其涼

さ

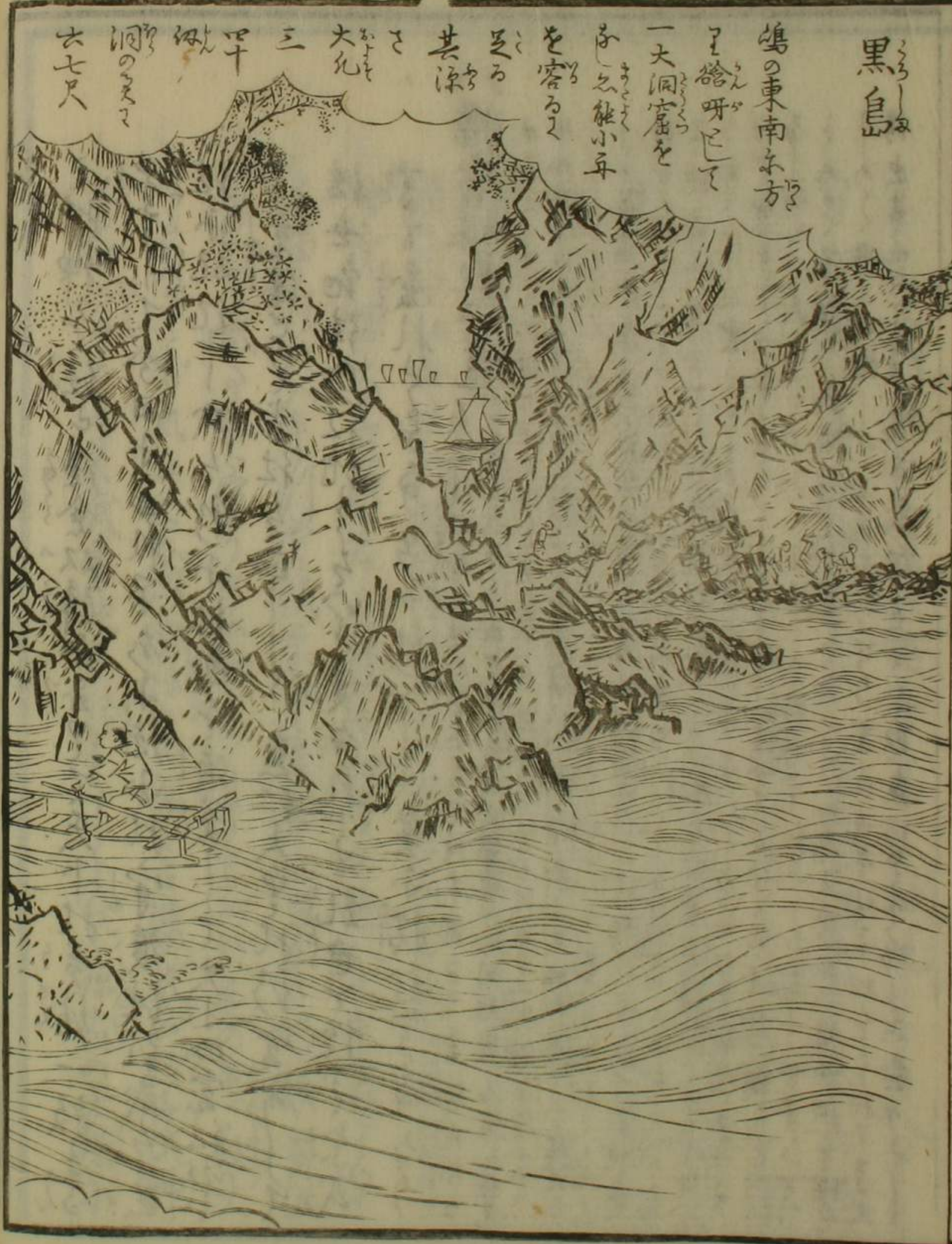
大元

三

早

洞

六七尺



計の大石

肅然と

立る人

の長

揮

立る状

ををん

老いし

伝不惑と

ちうなる

こしゆり

今の世小

米芥りん

毛をよみ

石大い

移む



平威をすんことおそく小つうて等すたるて是とつ
をたぬ于時永九年純集壬午季夏耕雲野納納純拜書

因小云純純々右大臣長親公の法号なりは公本小中もをりくあり
多るる中や奥國寺の例家の孫起及在田於靈貴公の孫起をもたせ
く多るり然る小二書しもそ自号んは法くをりは

公の傳ハ大日本史小も事く又くは是等ののりは
縁起表紙小云於唐二年七月七日有君命而尋尋國神社之舊記也
及干於卷故意其久而朽滅故結補之者也紀州日高郡衣衣八幡宮
縁起結表補破

尾崎

衣衣浦上々十丁條の海中小つうてを田於乃靈を中射でり周廻
二十丁づり小つうて樹木背後せり於志は紀小前藤上り苗小久礼
修りやとつるもは法を結でれるり久礼久礼を

佛石

里傳小つうて傳の南面小巖案つうて崖中の巖欠のこアてそ飛人の
色以平御小つうて流し

戸津井

戸津井とて西南多尾山を隔て小つうて小引浦小つうてはれも
區域を吳小つうては浦の仰小つうてはれも小つうてはれも
絶るくを捕るや

小引浦

戸津井とて破山を隔て海灣小つうて
白埼 大引浦小つうて海上

白埼

雪れを奪ひて海系小つうて出るる白埼の義む

二十丈ふも何よつてさくく海え岩がのりら
何の棹傾中ふきりひて老ふりた
あまけれそれか中ふ島長大臣の親神小つうてはれも
此約の飛をとめさくくも流るれはこつひ傳へそ
浪の子里も乞さくくも大寶のむう一人の又より
つむと藝てこまいあはれも悲しこふははらら
なれりも義ふむうがれは揺を沖やく紅をよび傳はれ
後むとこれあはれは腕のさる小つうてをさる

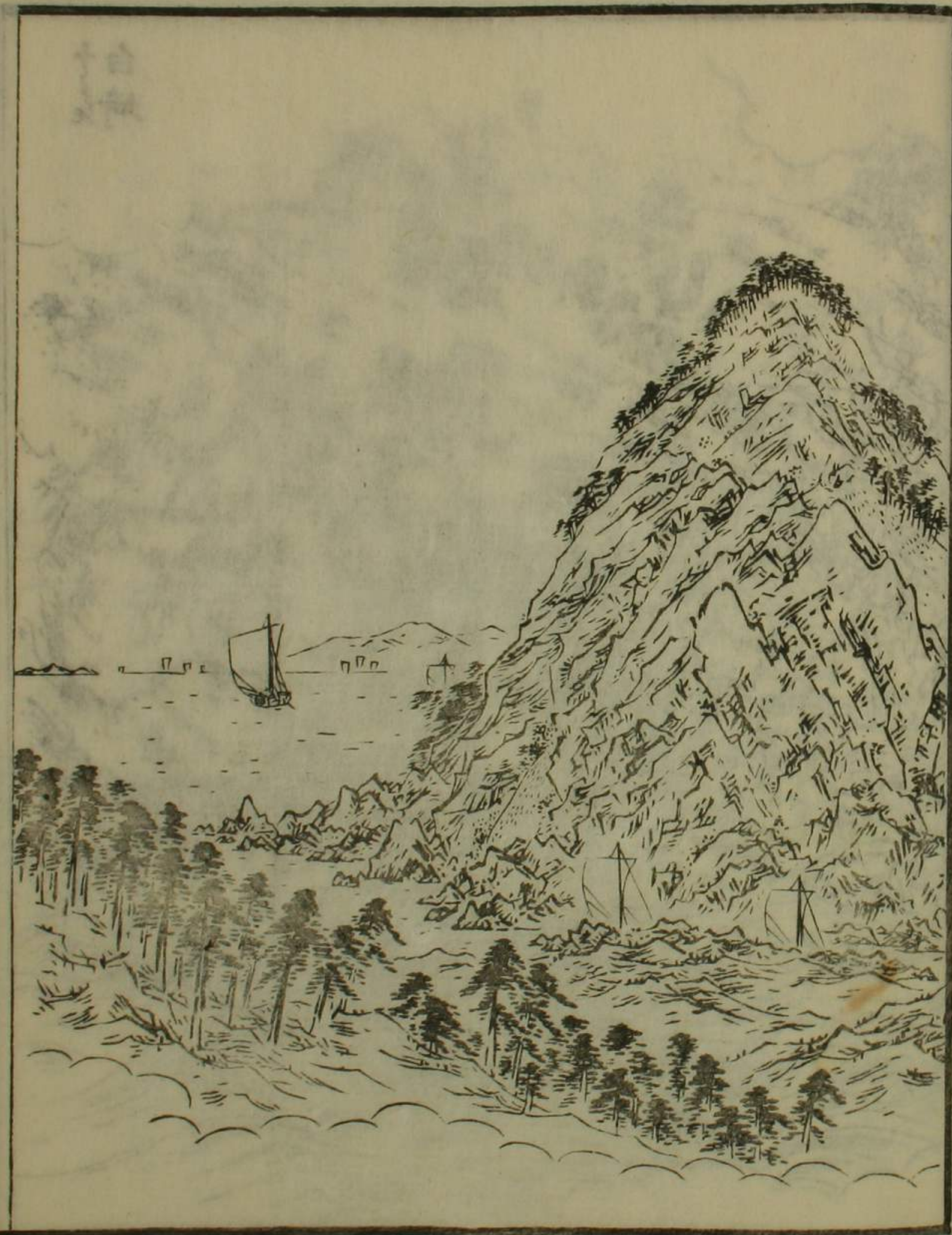
大實元年辛丑冬十月太上天皇大行
天皇幸紀伊國時歌
万葉集

白埼者幸在待大船爾眞捥紫貫又將歸見

汎舟游白埼

野呂隆訓
白奇萬葉集既有什其名舊矣在日高西界山足入海
可三四里巨巖競奪攢立累疊奇態萬狀下有石穴中
數千席其深叵測時有鈴聲而似巫奏故土人名以巫

松廬遺稿



戸津井
十九島

戸津井浦の海面は毎年然
 として宛研山の趣を具不
 不者これを十九島といへ
 と東南地方に接し其
 間断相挾みて絶小一溝
 隔るふ似一躍せし踰べく
 おかねさんとも満潮の時ハ
 通船状くくと往来す



白崎



狂哥

釣上れ

魚上り

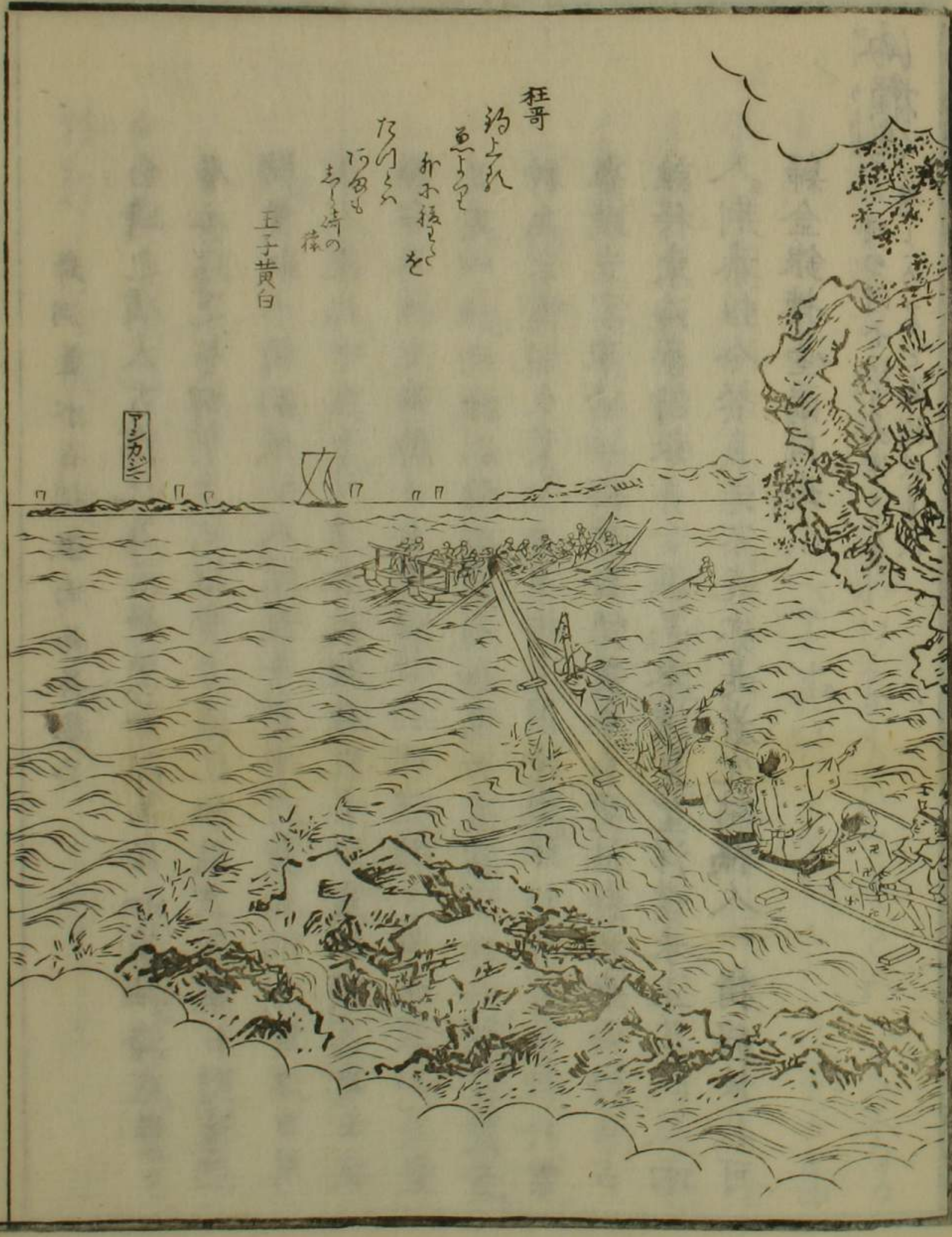
おん板を

たのしみ

らぬ

あつたの

王子黄白



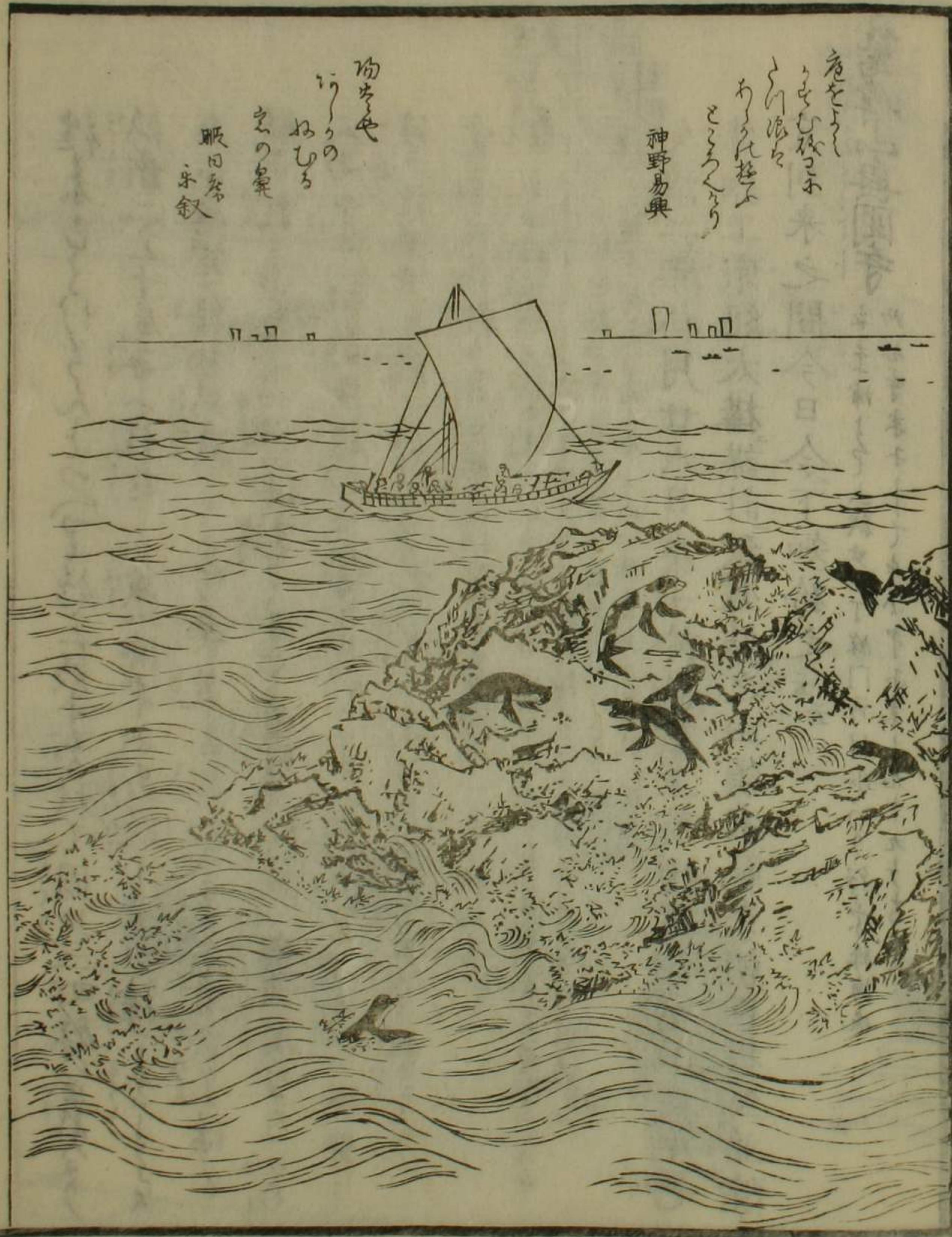
舞洞蓋水石相激而為異響已

白崎之頂太古霜化為石骨更蒼涼萬品如筍抽海底累々
層秀瑤芝房神劉鬼剝誰費力造化秘伎洩天藏石門巍然
開雙闕水精劉成仙人狀龍乎虎乎呵巖扃洞天雲深日月
長人謂此中坐千人清淑氣凝鍾乳香坤靈始鎖高唐女夜
靜每奏神巫舞鈴々金響瓊枝折回波鏜々鼉尾鼓知是鰲
足定四極南維別鎮群真府幽室必有藏碧錄好搜金簡奪
神禹只愧煙火薰此身隻擲凌波遂難臻怒浪簸舟輕於葉
塵蹟豈容攀嶙峋豁然自悟笑拳白更注餘瀝嘲海神自古
誰得東海藥壽張弄舌誰暴秦漢皇望洋嘆未止茂陵風雨
入荆秦雖令餐氣老不死亦是巖穴枯槁人一揖辭汝我可
歸金銀樓臺爾自珍

海懶鳥

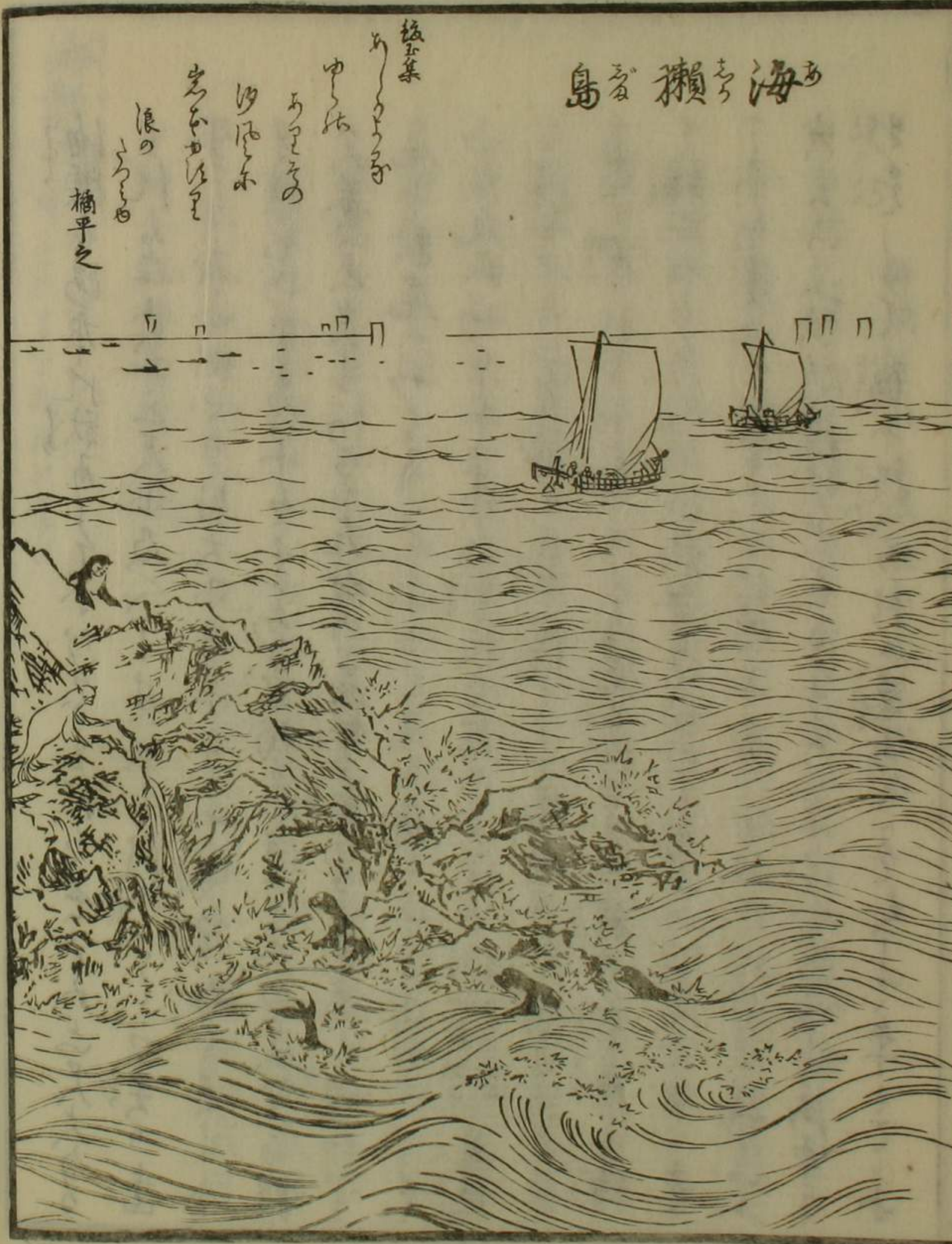
白埼の沖小つりは鴨と白
埼とのるど海流枕あり

海懶鳥うづら海懶うづら中なかつれれ秋あきめめして小こつりつり鳥とりもれれをを去さささめめ六ろく尺せふ大だいなる
もれれをを一いつ丈ぢやう二に尺せふ小こ及およぶぶ其その形かたちをを既すで小こくく口くち尖とがりり齒は
牙はをを大だい小こ似にたりり目め大だい小こ耳みみ小こなりり舌したをを鬚ひげ短みじかくく也なり一いつ
身み短みじか毛げののつつををたたふふをを毛け色いろをを柔な禡たひひたりり又また白しろ多おほくく白しろ雜まじ
又また養やしやうとと思おもひひももつつりり左ひだり右みぎのの扇あふぎ鬚ひげ尾おしりににつつてて末すえ小こ伎ぎににつつ
尾おしりをを秋あき尾おしりののややくくあありり小こききくく尾おしりをを接つぎぎてて又またおお髪かみををつつりり毛げ
小こもも凡たゞ又またつつりりてて末すえをを分わけてて指さすす也なり一いつ馬うま奥おく字じ小こ用もち肉にくをを魚うま
毒どく小こ巾きん子こをを緋へにに色いろをを傳たづなへへるる也なり一いつ胎たをを令しん産さん小こ傳たづな
てて功こうににつつりりててつつりりてて秋あき毎まい年ねんのの去さ用もち小こいいづづ方かたよりよりつつりり来き
つつりりてて其そののの去さ用もち小こ居いるるをを以もつててつつりりててつつりりててつつりりててつつりりててつつりりてて
或あるははつつりりてて以もつてて以もつてて以もつてて以もつてて以もつてて以もつてて以もつてて以もつてて以もつてて以もつてて以もつてて以もつてて以もつてて
物もの起おこしてして竊ひそかかにに投なげげらられれ患うれふふをを知しりりてて年ねん々々小こ



物々々々
 けしき
 好し
 文の案
 暇日
 楽叙

神野易興
 文の案
 暇日
 楽叙



海
 瀬
 島

松葉
 中
 浪の
 橋平之

橋平之

真國寺
惣門の圖



從來よりけらんといふは、此の原に分れて、岡田二町條の里あり、
 河津二十尾、毎子孫抱し、或は海中不出没し、魚と捕て食し、
 あり、海中種抽、根種とて、奥氣を忍び、一は者、飯を沸く、
 眠子就といふも、一個の丸、起る是と看、漢次る、最漢最る、
 人ありて、此の原に近づき、あはれも、何して、元と起し、
 没入、次海中と遊く時、あはれも、何して、元と起し、
 官命、此外扱る、と、其、次、冥、小、南、河、の、一、奇、物、あり

大浦
由良莊

白崎神谷、仰の間の渡、小、河、村、の、南、小、破、の、東、流、の、東、岩、上、老、者、石、人、ふ、る、や
 ハケ村を流、小、河、中、右、邊、幸、王、院、所、あり、し、り、
 本、流、小、河、又、も、今、その、一、條、を、九、小、我、以

東鑑云
 文治二年八月廿六日庚子、於蓮華王院、領紀伊國、由良莊七
 條、細工宗紀、太構謀計、致盪妨之、由領家範、季朝臣折紙、並院
 宣到来之間、今日、令下知給之云

鷲峰山真國寺

衣、衣、浦、上、り、山、城、廿、四、丁、條、門、前、村、小、河、り、釋、宗、隆、海、流
 妙、心、寺、末、子、一、て、幸、小、河、小、末、子、九、十九、ヶ、ち、り、り、



葛山五郎入道木像



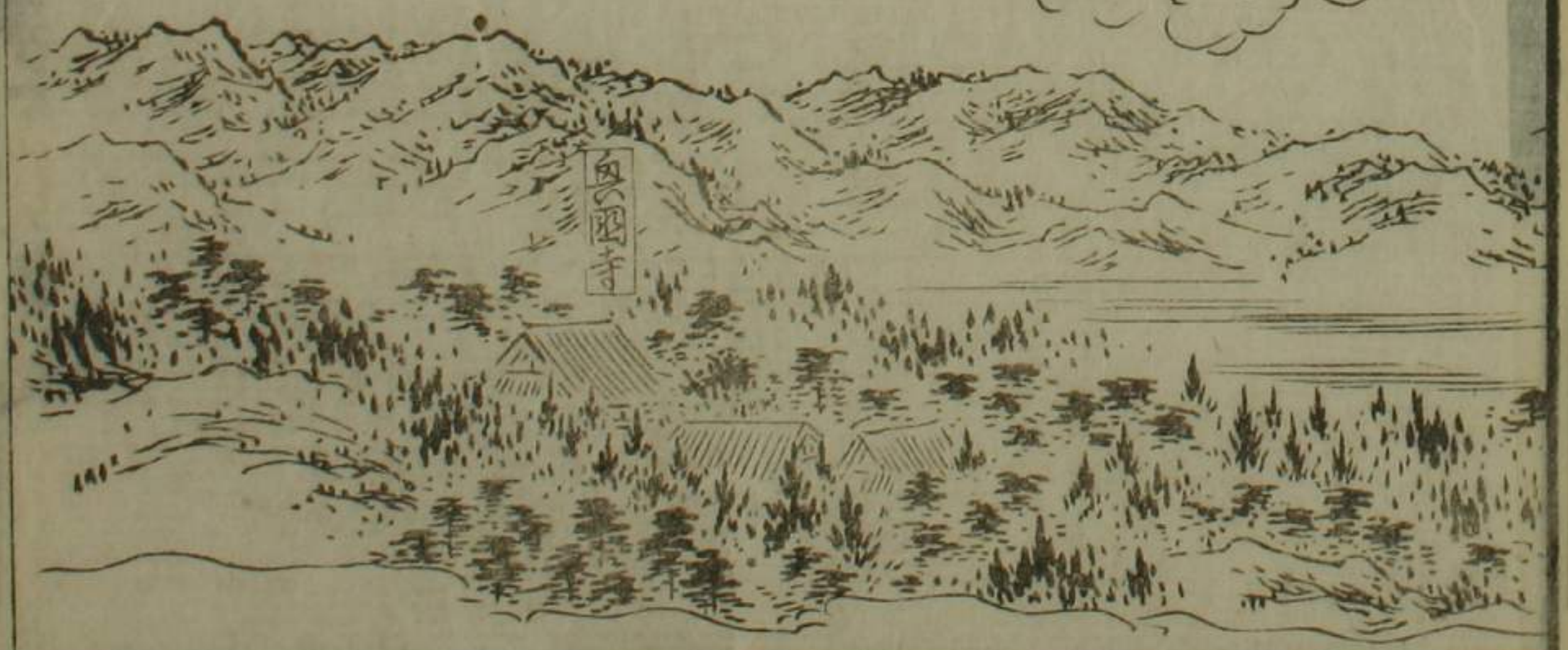
法燈國師木像



寄洲次願性寺（願性寺）於小て丸別の人毎迄二即入乃西入り遇
ひし西入將軍北洲頭北骨懐（骨懐）不せしを元出（元出）——願性（願性）
小与人願性（願性）を感謝志（感謝志）當寺小安那（安那）の石塔と建
て洲骨寺分を安（安）——梅尾（梅尾）の惠上人（上人）願性（願性）西方（西方）の寺
号と授（授）て永年（永年）此道元釋沙（釋沙）小法（法）ひて蒙文（蒙文）小て願字と
書せし心（心）折（折）由良（由良）依家（依家）方（方）の修（修）院（院）法（法）名（名）此洲（洲）从（从）る（る）は
洲代友の伊王（伊王）左邊（左邊）能入（能入）乃西（乃西）と願性（願性）と云（云）同（同）——寺
以願（願）の地（地）若干（若干）と當（當）ち（ち）と云（云）て——法（法）會（會）此洲（洲）善（善）提（提）不（不）と願性（願性）
蓋て小洲（洲）入（入）宋（宋）（小洲の所法某揚林と云法釋沙小春せりし小天竺二偈を引て
六尺卓前參話難退歩速觀明歷々運思近覓黑漫々銀山鐵壁雖無路透出透來且自
看其二曰火道本然何貴功不通一步卻能通盧談萬物皆無味身靜諸緣尽在空法界
聖凡非念外微塵刹海出胸中人疑個事吾應答
野草春來華自紅と延堂傳燈錄より）の志（志）乃多（乃多）を（を）知（知）り（り）て彼
將軍（將軍）此骨（骨）と存（存）傷（傷）ふ（ふ）破（破）り（り）し（し）紙（紙）託（託）次（次）師（師）あ（あ）を（を）
派（派）ひ（ひ）て宝治（宝治）三年（三年）二月（二月）以（以）地（地）より（より）私（私）を（を）給（給）り（り）て九別（九別）小

赴（赴）り（り）博多（博多）津（津）より（より）高船（高船）小洲（小洲）く（く）宋（宋）小（小）到（到）り（り）終（終）山（山）り
寓止（寓止）——字（字）此（此）堂（堂）號（號）建（建）て將軍（將軍）此骨（骨）號（號）等（等）身（身）記（記）る（る）
の肚（肚）内（内）小安（小安）次（次）又（又）無（無）門（門）和（和）尚（和尚）小釋（小釋）意（意）と（と）向（向）ひ（ひ）乃尾（乃尾）六（六）年（年）と（と）願
て海（海）の耐（耐）大洋（大洋）中（中）あ（あ）て（て）颶（颶）風（風）一（一）遇（遇）ひ（ひ）殆（殆）度（度）没（没）せん（せん）と（と）以（以）師
派（派）り（り）親（親）善（善）派（派）意（意）と（と）向（向）ひ（ひ）乃尾（乃尾）六（六）年（年）と（と）願
て風波（風波）折（折）不（不）収（収）り（り）——其（其）後（後）沙（沙）比（比）地（地）の務（務）京（京）を（を）屯（屯）り（り）
終（終）寫（寫）れ（れ）志（志）乃多（乃多）と（と）向（向）ひ（ひ）乃尾（乃尾）六（六）年（年）願性（願性）相（相）傳（傳）り（り）字（字）山（山）恒（恒）持
——盤（盤）崎（崎）と（と）名（名）づく（づく）（嵩山先師盤崎和尙が著せる圓菊集小年寺四
西方寺著嵩山集論法祖為字山遊換今名也ヤ）
乃尾（乃尾）六（六）年（年）願性（願性）相（相）傳（傳）り（り）字（字）山（山）恒（恒）持
奇湯（奇湯）志（志）乃多（乃多）と（と）向（向）ひ（ひ）乃尾（乃尾）六（六）年（年）願性（願性）相（相）傳（傳）り（り）字（字）山（山）恒（恒）持
次（次）飛山（飛山）後（後）字（字）多（多）上（上）字（字）師（師）を（を）後（後）孫（孫）の託（託）交（交）不（不）る（る）と（と）願性（願性）
を詢（詢）り（り）ひ（ひ）乃其（乃其）時（時）沙（沙）年（年）と（と）向（向）ひ（ひ）乃尾（乃尾）六（六）年（年）願性（願性）相（相）傳（傳）り（り）字（字）山（山）恒（恒）持
對（對）志（志）乃多（乃多）と（と）向（向）ひ（ひ）乃尾（乃尾）六（六）年（年）願性（願性）相（相）傳（傳）り（り）字（字）山（山）恒（恒）持

法燈寺の使僧二人上州赤木山に至
 りて大文狗松の坊日唱し當寺
 再建の約をくめ松を友より
 二堂の山臥み肩をて香をを
 とびくくくくくくくくくくくく
 写集みあ〜〜〜見たり





興國寺に藏ひる所の聖徳太子一代圖古画の中抄出



其二

躑躅畫像一幅

孝尼小法施の身子孤山画之小所の像を画しめて眸子
眼を法入海軍と云く有眼を慈母以孤山画像と云て
契源と連長と此像の物も亦も子の抱くれを強ひしり有る
アノノと下ノノと云列小及之り亦小孤山ノノを智貴以の抱く
像の正正を先して撰一ノノ多れが包画像時跳一ノノ
を夕人の抱大子野々として即指以其契今聖以 後
りて画像と標中不述へて信去あて以時法施國の國所
流以る類の如くして又孝子愛慈母以る子の法施小所
の契

魏女寶珠一顆

孝尼玄成時一女來りて少小を以て善法戒を授け
果して二百此及雷電一と云く去る所を是法女
を降る所を是法女一と云く去る所を是法女
物一顆ありと云く紀國造殿文
かあ珠記の如くして出次

唐慈親音像一軸

佛舍利二粒

終杆一口

後湯成院御書

雪徳太子

子一代圖古画一幅

その他和漢古書

百幅名品

尤多し

心ども煩し

今畧次

又那契那

抄度寺

小傳

此小れ傳る

文書

什寶

教品

とも

多し

延寶

傳

枕

縁

子

縁

子

縁

子

縁

子

文慈初年

佛眼より此書多小法衣一頂七系圖一箇等と云
これ等も我れども今傳るる次惜むべし
小なり高き并山の身子を一法所置奉るもの
なり今其も度以あり付定と云く小ゆい

鷲峯十境

十境の偈ハ七云此法あり元無元年仲林法寺と云く僧の字一玉
これをも十枚の類く傳
衣を小指く其法今聖以

傳衣室

酒琴巖

標榜樹

如意峰

度度橋

伊法窟

平等塔

産祥石

欽次洞

靈源水

坐禪石

坐禪石中子有り
年傳小云此令臺此上小石石のりし洲方小縁
て日談書しり侍傳等所此傳く多と失して
坐石此畔小引る小鏡等大士儼然と云く
竹傳等して教云嘆一考と云く此本形小縁
号して坐禪石と云

坐禪石

坐禪石中子有り
年傳小云此令臺此上小石石のりし洲方小縁
て日談書しり侍傳等所此傳く多と失して
坐石此畔小引る小鏡等大士儼然と云く
竹傳等して教云嘆一考と云く此本形小縁
号して坐禪石と云

普化岩 ちんけいさん 凡そ此より

國師歸朝の時法華國依理正宗怒とりの居士とほく
うつて法華を尊らるゝめては岩小あうじに居士の
少獨善化宗法派の虚無僧の澄揚小志を其徒相つと
て信ぜし小天正念火此法法團小難教して今々善化岩の
名れし抄也

閑南集云開祖自宋歸時有四居士相從參禪之暇皆好吟尺
八輩於船中有省值海霧冥濛弄二曲以寄道情遂以霧海路名
其曲到山之後職皆司浴院云浴院旧址稱善化谷蓋居士有於善化明頭
來因緣契投者故名今字其道者亦以善化為祖乃俗所謂虛無僧是也

因予の虚澤傳記小師宗此渡小寺といひし時善化祥
師十と善化疎張系小虚澤八の一事と授らる歸朝の後予子
寄牛小傳又小依理正法善宗怒の居士も依者と予り
後予寄牛仍師の志と依地を去る乃路の末毎依者と
後しや女人小知らるる一より依宗起くといふ今字つ
本も教十ヶ寺といふ新給法括懸派寄牛派小葉派小葉

開山堂聯

語要依聲) 字波難) 軌範

行須緩步 習馬務之威儀

徑山無準

派極地派字流流く分れともが中不活東れ明暗寺の當ち
此末寺小志て其寺法嗣ぐもれ必あち小末のころく
授戒するを以由縁小よれるるなり 抄入り虚無僧の字知進賢
牙合あり々善僧とカ一判
詞小善僧の三昧然るぬ者小く多而桶桶小は多々其法のつた小よりして天
八ふく介わわ利の業うさもれりやうとらして七十一番藏人考之合考小
も亦善僧なり

一山聯額教多さ小堪ざれハ僅小其二二を九小掲ぐ

龜山古堂
古梁
深友揮千秋
德輝

鷲峯
法鏡照曜
步丈之先
龔

佛殿聯

開山堂上階

自若
夾山

全下階

沈雲
三龍梅洲

全無門和尚

綿枝
葉茂
無窮
古線香波
一山一字

大 門 額

天泉山住宋泐書

關南
第一
禪林

中 門 額

竹友年七歲書

鷲峰山

禪堂前門

海會

幸魯盛典總裁官太子
少師
繫封衍聖公孔毓圻

呼猿亭

呼猿一石架在飛木東
山圍聖窟沐振松古鏡
雲霧浮層力步趨揚
境殆歷荒澤廣成之友
掛錫筓峰自陪
致招終吾表幽堂不巳
然一絕
千多也孔來小爾浮樓
逐恰以理之晚石在年表
呼猿亭在在松崖台
天松

嘉子題

南風集

過興國寺并法燈國師像

僧法霖

師去知何處高名今已傳
斷碑橫草際靈塔倚松巔
山學

維摩默雲參伽葉
禪登臨時極目空
畫三千

閩南集

法燈國師贊

僧默洲

昏衢法燈迷津寶筏威風凜
似滿地秋霜光明赫如麗天

日月初西海兮入無門
閑歸東土兮開耆闍崛住山當卓

錫杖妖魅頓潛說法感兩寶珠
迅雷忽發敢讚一辭罪當

僭越夫是之謂三朝一國之師表
五祖七世之的骨吁盛

矣哉

將軍記云

明德三年二月山名修理亮發理力
失人一族行於六十二人

子小系つとく由及此湊
子らがて奥國を此公智上人
をて

出家して皆ちつりく
小系つり云

家集

與ふとく右アしての
とて

此れ家集の
とての事も明かん
源令綱

日

河邊にて
善むるの事
これ種の子
百也 全

修善寺其國寺の末裔 七丁許小あり

法燈小沙牟傳小文永三年沙六十集此時神純小
て候列小形く母堂紙撰本く然燈小流く一かへるさ
尚寺以くめく孝女世く小聖も没せられく墳墓とされ
東南の結界此地小築く云々

五天神社中村小

白山権現社日村の北

東泉寺日村小あり

關南集 遊東泉寺詠極 僧默洲
霜薄南中紅葉稀獨憐楓樹映禪扉霞標近接天台色

雲錦新成織女機且訝枝々燈火點又看片々雨花飛

人間縦有停車賞爭似開窓對落暉

妙見宮如村小あり

長谷寺日村小あり

長谷寺日村小あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり

地小あさみ運を丁大木小長谷観音同形の像を幸そくして長谷寺と
号し一丁宝珠一顆を嵩山小終一畝人と形をく地中不現藏以有
小号珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり
紀國造飯文の由珠記小三應四年二月十九日午の時小沙牟與小沙牟小
を幸そくして長谷寺とつ小真小未たり 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり
の地中不現藏以有 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり
て堂中をえんば 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり
ぬまに及移くの時ありて 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり
らぬくありて 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり
や一或は飛泉の流る小終一畝人と形をく地中不現藏以有 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり
かの殿を採る者小後小ありて 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり
をもて採んとす小終一畝人と形をく地中不現藏以有 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり
れが形を採る者小後小ありて 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり
の如くを採る者小後小ありて 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり
て妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり 珠石山とつ小真小未たり 妙見の地あり

関南集 五日 同 諸子遊長谷寺 率中楷公見 賦示寺主明禪 僧默洲
同袍秋日叩禪扉寂寞林丘人事稀習靜原知塵外是
論心寧比世中非遠簷雜樹鳴蟬乱出岫孤雲倦鳥歸
更有瓦爐鴻漸趣茶烟片々逐風飛

御敬誨細代村小あり

長谷寺

鈴屋集

山はれおこ

あこがれおこ

たえぞいむ

あひ乃るまむ

そのゆめさる

本居宜長

田良坂

鐘楼

秋守軒天

開山塔

龍現洞

荒神

粟田河

長谷

瓊珠峯

本堂

庫裡

浴室

井戸



小杭 志賀屋の小名なるれども 村に於て小流をるせり

宇佐八幡宮 八幡宮の文字乃古き額なりて亦團守の筆なりといひ傳ふ永仁四年の棟札小奉納在傳つ 宇佐八幡宮の棟上実徳といふ神を飯上某

法皇御年譜云

建治二年十二月十七日濱宮奉遷神体於新宮之次師將願

性 葛山五郎 藤原景倫 遺付宝鏡一面納于神殿云

由良 棟札村を撰て九右此出押三十四帖は面小き玉徑二大九二十町ふ及び 藤原景倫 遺付宝鏡一面納于神殿云

由良 棟札村を撰て九右此出押三十四帖は面小き玉徑二大九二十町ふ及び 藤原景倫 遺付宝鏡一面納于神殿云

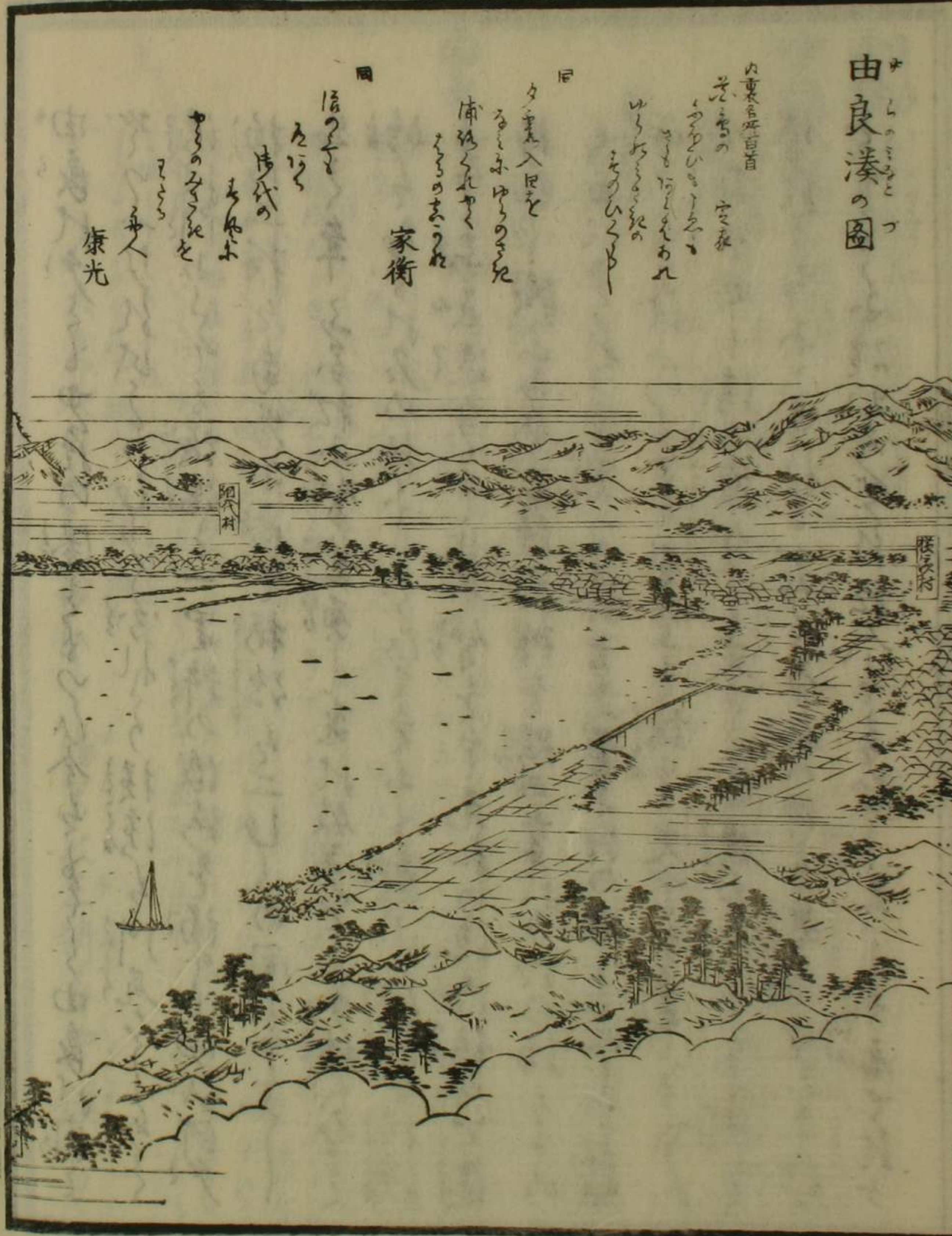
由良 棟札村を撰て九右此出押三十四帖は面小き玉徑二大九二十町ふ及び 藤原景倫 遺付宝鏡一面納于神殿云

由良湊の圖

内重長右衛門
その名の 守る衣
くついでいしとて
さしとけしとあれ
ゆきおとせぬ
そのいしと

夕暮入目と
るふゆゆのそら
浦迄くればや
そらとまうね
家衛

ほつと
たらく
徳代の
まねと
やのふとを
そら
舟人
康光



喜波三吉
紀のふや
ゆゆのふとれふ
口おへく
ふれとまり
たらく
まひとふ

壬辰年私とえ
ゆゆのふとれふ
あふらのそらと
くついでいしと
まねのふとれ
やとれ舟人
平政村ね長



其二

新三景 左を境中ねまはる

紀のうらやま

いづれもろりく

いづれもろりん

いづれもろりん

よまの岬

五五五

紀の小ふくろ

えりてはと

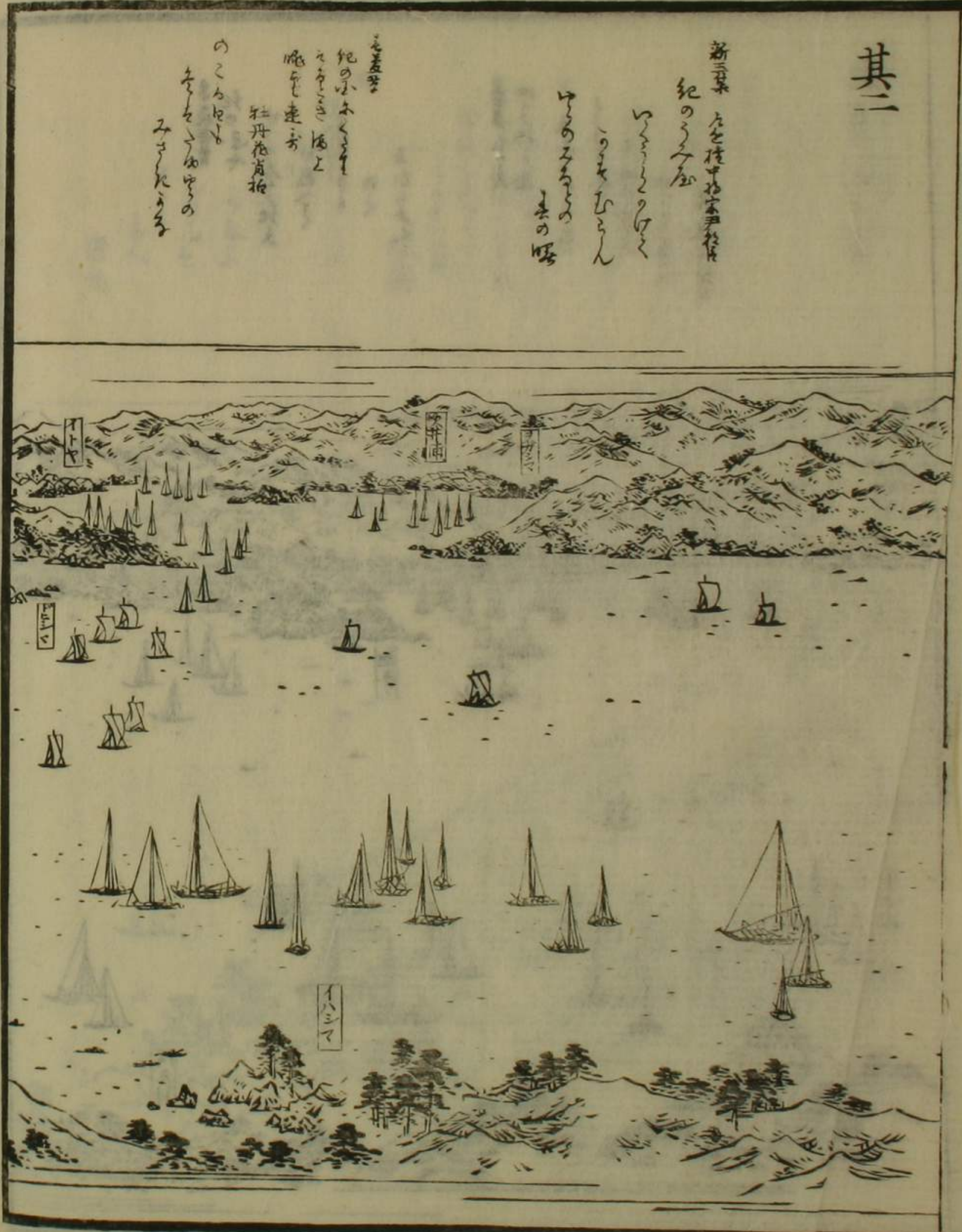
庵をい連方

牡丹花貞柏

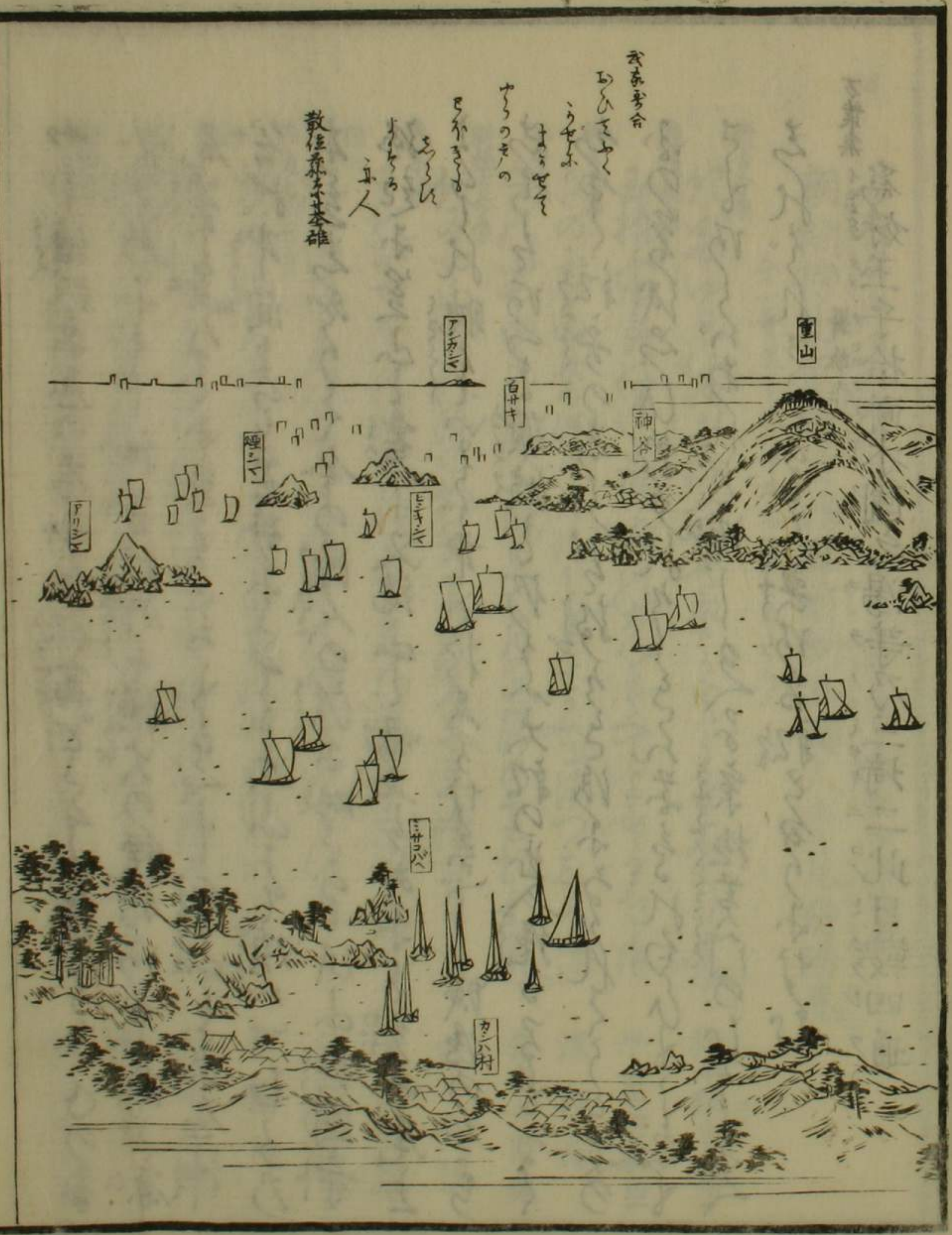
のこらねよ

そとをうやらの

みさくら



武家考合
あひてやく
うせふ
まよせ
やうのそ
まよせ
まよせ
まよせ
まよせ
敬佐原本茶雄



や一傍れ系屋の存少く紀寤とてく浪のくまのの
くさめふくく神宮に押と漁火の煙行河白が前々
尾葉のふらふらと小並つくとあもまきぐく
宮れ中間よると雲井ふくく大山く項六一むら乃
あま志がりく今の清人の改小改くとい山奥國寺
縁起ふ並ふと書く又端ふと鳴ぶらがふと雲也尾上
よられ眺をいとも中く行らうらむるぐく一城傳のをら
あちとあつと波と行らふ大船の出入絶るるもく
あちと紀の志くべら舞らと浪ふらぐれくくく要の
ふの葉紙あひ船りれくくくまをるれ白ひくくくも
くもあくくあれと浦くくく子系松葉門のむくく
志れをれくくくくくくくくくくくくくくくく

万葉集 爲妹玉乎拾跡木國之湯等乃三埜二此日鞍四通

同

大宝元年辛丑冬十月 太上天皇大行天皇幸紀伊國時歌
朝開擲出而我者湯羅前釣為海人乎見變將來

新古今集

統後撰集

統古今集

玉葉集

新統古今集

夫木抄

内裏名所百首

紫禁和歌集

金槐集

紀よやゆらけ湊ふ捨てふなとくわくくをみくくく
玉捨ふゆらけ湊ふ照月れ光とてよよとる志源
くこのふも由良の押の月はくませくく湊つ志源
きれふもゆらけ湊ふ照月て月の出の志松あり
紀よや由良れ湊の朝朗雲れ危ふ舟漕くくも
きれふもゆらけ浦風おきてあはし湊ふまはる
紀の海のゆらけ危る渡船くれ押くくくく
橋吹ふもゆらけくくくくく由良れ押の歌のくく
唯つくくふもゆらけ湊て紀よや由良の押と渡る紀人
秋くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
打くくくくくくくく紀よやゆらけ押の巻けけ繩

権中納言長方 平重時朝臣 源師光 前内大臣通 後小松院 室嘉門院四條 民部卿為家 順徳院 兵衛内侍 順徳院 鎌倉右大臣

沖つ風浪吹きて紀のふや由良はたつては夕暮のま

関白

日 秋舟こゝ由良は押の汐月ふまうとふはたつては夕暮のま

左衛門尉長親

日 由良はるを漕出てこれる夜のみ坂をふまうとふは

慶運法師

日 中これや漕漕出たかられ者もたふまうとふは

宗祇法師

河内浦

村中浦邊の村の松の影に

家集

村の松の影に

日

玉拾由良は漕の原松をむむとてつら涙おこし

源朝臣令綱

日

月夜ふかたは漕の月影もたつては夕暮のま

日

月夜ふかたは漕の月影もたつては夕暮のま

日

月夜ふかたは漕の月影もたつては夕暮のま

富浦の浦と小浦の浦

教專寺

紀伊名所圖會後編卷之四終

